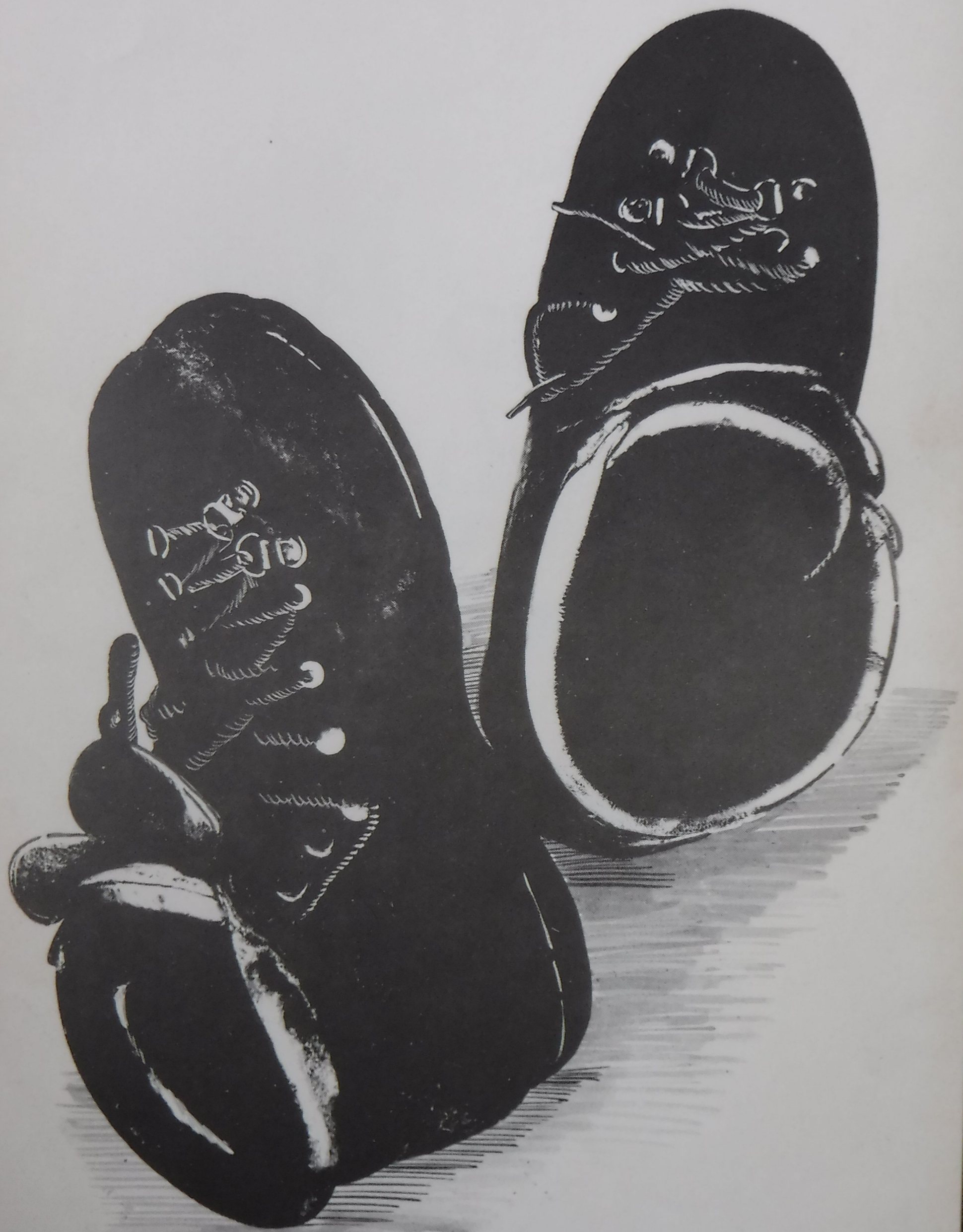
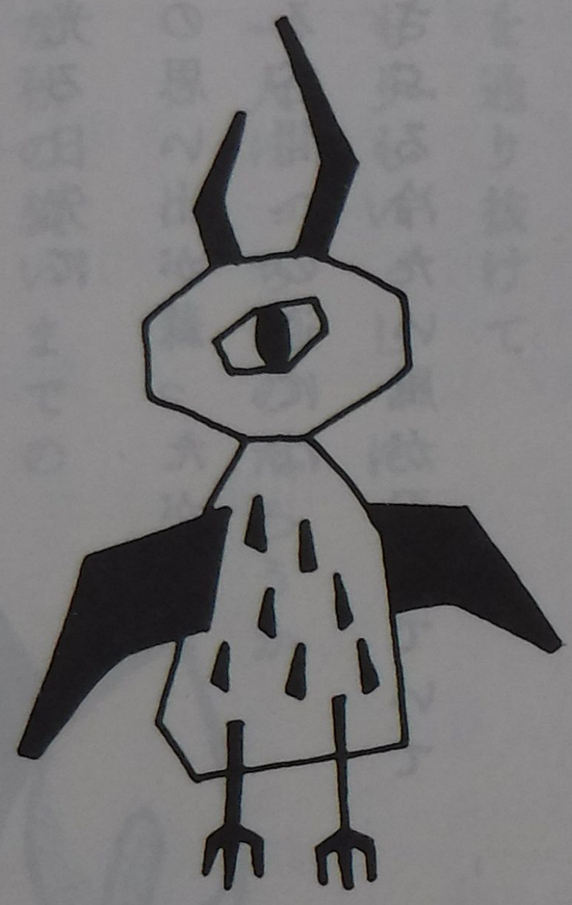
YAMAGUTSU·XII

S.W.V.O.B.会会報「やまぐつ」第12号 1981年・夏



S.W.V.O.B.

YAMAGUTSU



Vol.12

初秋の苗場山で

淋しい風をみてしまったのに
素敵な秋を捜しに出掛けたのに
池糖に光る日先に
薄ら夏の思い出が蘇った
夕暮迫る谷間への道には
心を揺さぶる冷たい風が忍んでいて
ヒトは
歩むのを止めて
過去を振り返った
遥か山の頂に日が沈み
もうすでに
夏は過ぎ去っていた
八月の山でみた
ミヤマトリカブトの青紫の花が

その谷にも咲いてはいたが
何も語りかけてはくれない
秋は無口なのだろうか
ため息をつけば
夏の未練が
周囲に漂うけれど
風が何処かへ運び去ってくれる
私の体を通り抜けて
体の温もりもいっしょに
秋は　一人ぼっちなのだろうか

華やかな秋の装いまで
少しの間
山には
淋しい風が住んでいる

理



Yamagutsu Vol.12 Contents

5 会報発刊にあたって ―――― 諏訪部信一

6 55年度行事報告

7 市民ハイキング・尾瀬 ―――― 松田英一郎

8 ファミリーハイキング ―――― 諏訪部信一

9 黒部川・上の廊下・ガイド編 ―――― 佐藤　通

11 懲りもせず黒部源流 ―――― 田中　広志

13 相模川・川下り・PARTⅠ ―――― 諏訪部信一

15 南アルプス回想 ―――― 井上　京子

17 相模川・川下り・PARTⅡ ―――― 諏訪部信一

19 '80年・夏・キャンプ ―――― 新津　正己

20 夏合宿・西穂縦走 ―――― 江成　利一

23 優雅な大名旅行・上越の山 ―――― 諏訪部信一

25 西丹沢・ザンザ洞 ―――― 川嶌　菊夫

26 救急法講習会 ―――― 増田　義昭

28 お月見山行 ―――― 秋山　徹

29 スキーPARTⅠ ―――― 諏訪部信一

30 米子沢へのお誘い ―――― 萩原　進

31 '80年度の山行 ―――― 小沢　聡

33 御坂十二ケ岳・ひとり言 ―――― 榎田　一典

34 郷土研究について ―――― 小宮　豊

35 黒部川・上の廊下・感想編 ―――― 佐藤　通

36 雨のキレット＋α ―――― 榎田　一典

37 雑感・北沢峠 ―――― 増田　義昭

39 突然目の前に……！ ―――― 新津　正己

40 飲み会2題 ―――― 諏訪部信一

詩：　初秋の苗場で ―――― 理　：　2　　カレーライスの歌 ―――― 僕　：　42

山が抜ける ―――― 普　：　43

会報発刊にあたって

第十二期ＯＢ会　会長　諏訪部　信一

立春を過ぎて、今まで寒さばかり気になっていた日差しの中に、キラキラ光るものが見えて来ました。今冬は例年になく、寒さの厳しい年となりましたが、会員、全員の努力もあって「やまぐつ」12号を発行する事が出来ました。会員及び会友諸氏の常日頃の協力を感謝してやみません。昨年は編集の都合もあって発行が大幅に遅れてしまい、申し訳なく思っておりました。この会報は、会の活動の報告と言うだけでなく、会員の会の活動に対する意見や、個人の生活主張をも含んだ、範囲の広いものなのです。会報の原稿と言うと大げさに考えてしまいがちですが、今日、ここに編集されたように日常気のついた事、山へ行った感想、何んでもよいのです。今年は会の活動も、一つのレールの上を進んで行く感じで、特記するほどの活動もなく、かと言って低調と言うわけでもなくと言った感じでした。全員で参加の出来るような山行と言うものもいかわりに、個々においては、黒部へ、南アルプスへと少人数のグループではあっても活発な活動が記録されています。会の財政は、前年同様会費の滞納に悩まされながらも、会計以下、なんとかやりくりをしているのが、現状である。昭和43年設立以来13年の歳月がすぎて来たＯ・Ｂ会であればこそ、ここらで、今までの活動を一つの足がかりにして、大きく発展していきたいものである。近年、会のものが、あまり聞かれなくなり、積極的に参加する事をためらう感が一部に見られるが、自分の意志でより一層の積極的参加を願いたいところである。古くから参加している人達は、現在社会人として、第一線にいて、公私共に忙しい毎日であり、会の活動に対しても多くの障害のある事は事実ですが、今までの努力を生かす為にも、今後の努力が必要と思うのです。若い時の苦労は金を出しても買えと言いますが、人間、楽な方がいいにきまっています。しかし、何か一つの事をやると言う事は人生の中で大きな影響が出てくる事と思います。Ｏ・Ｂ会は、高校のワンゲル部の卒業生と言う一つの共通点はあるものの、年令も違い、職業も違う人達が、集まっているグループです。その特性を充分に発揮してより楽しい会として行きたいものです。最後に、毎年、会報の発行に当って、その編集の多大の労を発揮してくれている新津さんに感謝の意を表します。

55 年 度 行 事 報 告

S 55　4月13日	55年度総会　矢部青少年会館
4月30日～5月5日	5月合宿　尾　瀬
5月17日	5月定例会
5月31日～6月1日	沢登り　丹沢玄倉川　小川谷
6月　7日～8日	相山協市民ハイキング　尾瀬
6月15日	ファミリーハイキング　南高尾
6月29日	相山協沢登り実技講習会
6月22日	6月定例会
7月12日	7月定例会
7月24日～8月1日	黒部川源流　中ノ廊下
8月　3日	相模川川下り　第1回
8月　7日～13日	南アルプス南部縦走
8月　9日	8月定例会
8月10日	相模川川下り　第2回
8月23日～24日	神ノ川キャンプ
8月　2日～4日	市民富士登山
8月24日	遭難対策救助技術講習会
8月26日～29日	北アルプス合宿
9月　6日	9月定例会
9月13日～15日	苗場山山行
9月20日～21日	沢登り　西丹沢ザンザ洞
10月　4日	10月定例会
10月　9日～12日	南アルプス　仙丈ケ岳
10月18日～26日	救急法講習会
10月18日～19日	お月見酒盛山行　小倉山
11月　8日	11月定例会
11月22日～23日	三ツ峠ゲレンデ
12月　6日～7日	忘年会　西野々
12月13日	12月定例会
12月30日～1月3日	スキー合宿
S 56　1月17日	1月定例会
3月　7日	3月定例会
3月25日～28日	現役送別山行　北八ケ岳

市民ハイキング・尾瀬（相山協）

昭和56年6月7日～8日

松田英一郎

昭和五十五年度の市民ハイキングはなんと一泊で尾瀬というたいへん豪華なものだった。我がOB会からは増田さん、平田さん、そしてこの私の三名が役員として参加した。

六月六日夜、市体育館前に集合。この時になって初めてわかったのだが参加者はほとんどが中高年層で、平均年齢四十と？才ぐらい。その中に二十代がチラホラといった感じ。やはり若い人は学校や仕事がいそがしいのだろうか、それともただこういった市の行事に無関心なだけなのだろうか……。というわけでなんと私は参加者の中で（役員を含めて）最年少だった。

相模原を出発したバスは夜通し走り続けて翌朝富士見下に到着した。幹部の役員にはちゃんとバスの席があるけど、下っ端の役員にはバスの中央席、つまりすわり心地バツグンの補助席が用意されていて、おかげで朝まで一睡もできなかった。その寝不足の目をこすりながら富士見下から富士見峠へ、そして尾瀬ケ原におりた。天気のほうはまあ良くもなく悪くもなくといったところ。足もとではきれいな水芭蕉さんたちが微笑んでいるといえば聞こえがいいが、腐ったようなミズバショウが咲いていた。おまけに湿原はカラカラで、イマイチの感が強かった。竜宮から一部は三条の滝方面へ、残りは尾瀬ケ原をぐるっとまわって無事に見晴の小屋に着いた。小屋に着いてすぐ役員の話し合いがあり、その時に一人に一缶ずつビールをくれた。これを飲んだ時、ああ来てよかったと感じた。そのあと平田さんは彼氏に、増田さんは彼女に手紙を書いていた。私はその横でさびしくおつまみを食べながら平田さんの分のビールを飲んでいた。それから夕食をすませ、寝たわけだが、増田さんは部屋から追いだされ、階段の踊り場でシュラフカバーで一人泣きながら寝たそうだ。

翌朝ものすごい豪雨があったが、出発する時には上がっていた。今日は再び富士見峠に登り富士見下に下るだけ。あっという間に着いてしまった。

今回私は役員として行ったわけだけど、ほとんど仕事はまかせっきりで、ただくっついていったという感じが強かった。反省してます。だけどケガ人もなくて無事終わったし、みんな表面的には喜んでいたみたいだったし、まあよかったんじゃないでしょうか。

ファミリーハイキング

昭和55年6月15日

諏訪部　信一

朝、目をさました私は、外の天気を見た。くもり。しかし、昨日の雨も上り、まずまずの天候である。予定では、今日は、ファミリーハイキングの日である。朝になった今も、参加者がはっきりしないが、会友の人達にも連絡してある為、あちこちへ連絡を取る。佐藤君や倉地君は出かけるとの事。千秋さんと相談の上、我々も行くことにする。我家のお姫様を起して、朝食を食べさせる。もう九時になってしまう。京王高尾駅へ電話をして、遅れる事をアナウンスしてもらう手配をしたりして、何とか出発。我が家の梓姫様は歩く事が気に入らないらしいが、駅まで何とか行きつき、無事電車へ。八王子から高尾駅へ、そこから高尾山口駅へと電車を乗りかえ、全員が集合したのは十時三十分頃。それでも、OB会の人達は和気あいあいとして、出発。高尾山口駅より、国道20号線に出て、国道20号線を一路相模湖方面へ歩いて行く。梓姫は最初はは山君などはライトピールを傾けながらの登山である。私も今日は、ニッカーズボンに登山靴と言ういでたちではなく、ジーパンにスニーカーと言う、背負子に子供をしょって、いかにもニューファミリーという感じで登って行くのです。小一時間登ると綾線へ出ます。綾線には綾線上に左右に道が続いていますが、我々は、コースを左に取って峰の薬師へ向います。天気も薄日が差しはじめ、初夏の山はむし暑さもなく、右手に津久井湖を見ながらのパノラマコースです。背中の梓姫は終始寝たままです。そろそろお昼にしないかと、話し合っているころ、ぱっと目をさまして、背中で動きはじめました。昼食は山道のはしへ陣取って、皆持参のおにぎりをぱくぱく。初夏とは言っても、今年は割合に涼しく、木影に入るとヒンヤリとするほどなのです。食後は、佐藤君の野立てのお茶をごちそうになり、梓姫は、藤づるで作ったブランコに乗って、大はしゃぎである。一休みの後、出発した我々は尾根づたいに峰の薬師へ。峰の薬師から津久井湖畔の道路へ出て、少し歩いてバス停へ行き、そこからバスで橋本へ帰って来た。当初心配された天候も一日中良く、梓姫も私の背中にほとんど乗っていたが、のんびりとしたハイキングを楽しめ満足した感じで、最近は、山へ行くと言う事は楽しい事と言う認識を持っているようである。今後も、今回のような計画を数多く実施して、気楽に皆で楽しみたいものである。

黒部川・上ノ廊下・ガイド編

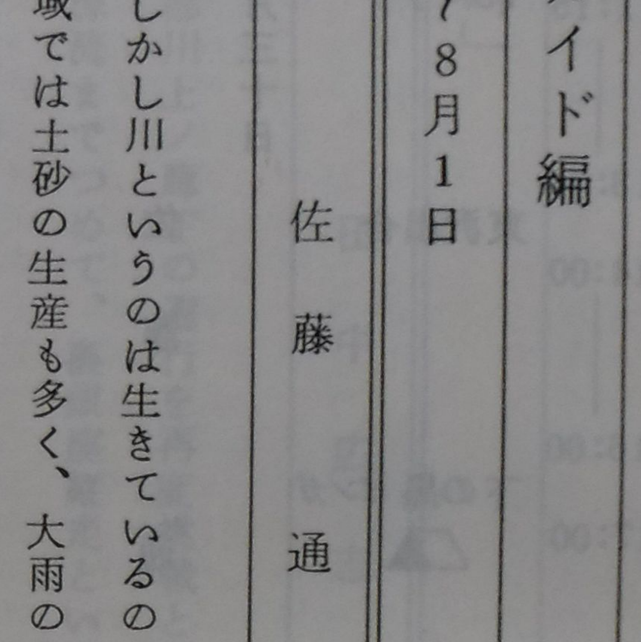
昭和55年7月24日～8月1日

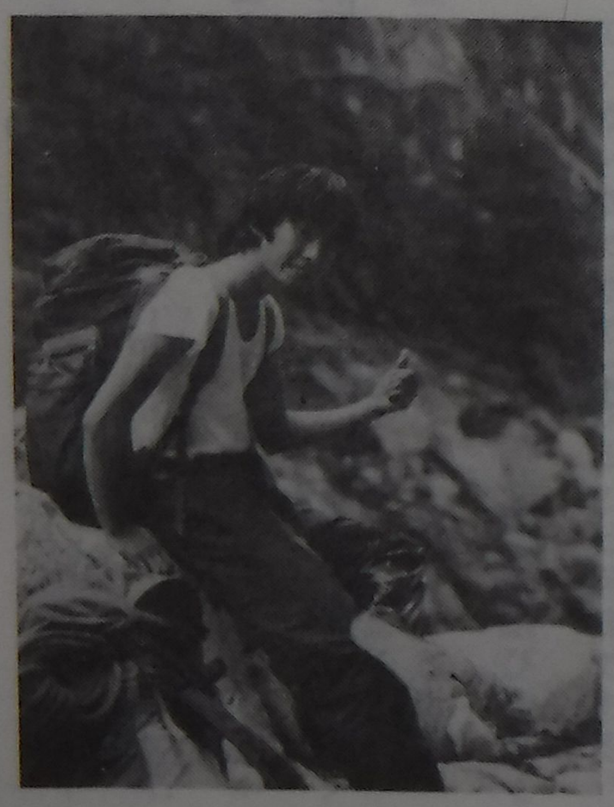
佐藤　通

一応ガイドのつもりで書きます。しかし川というのは生きているので
す。特に治山の行なわれていない流域では土砂の生産も多く、大雨のあ
った年などはその川の様子は一変してしまいます。ですからこのような
山行を行なう人たちは、あくまでも自分の目、耳、考えをもって道をさ
がして下さい。では始めます。

東沢出合までは一般の登山道を使います。まさか黒部湖を泳ぐ人はい
ないでしょう。針ノ木峠を越えてもよいが一日は余計にかかってしまう
でしょう。

東沢出合より下の黒ビンガではたいして辛い徒渉もなく、比較的楽に
歩ける所でしょう。この辺りは黒部ダムができたために河床が上がって
いるのでしょう。特に東沢出合付近でよくわかると思います。上流から
の土砂で湖は年々浅くなり、それと同時に上流の河床は上がって行くの
です。よく知られているのが天竜川ではないでしょうか。その他の川で
もダムができたため河床が上がっています。黒部川も例にもれずこの現
象はあります。しかしこのダムのために下流では土砂害がなくなってい
ら変らずに流れているから、けっしてあなどれません。黒ビンガ付近は
徒渉の繰返し、しかも川巾が狭く流速が速いため非常に困難なのです。
口元ノタル沢（この名の意味は出口に滝があるということで、タルと
は滝のことである。ついでにビンガとは岩壁のこと。富山側ではガビン
という？）この出合をすぎるとすぐに廊下状に川がなり、とても泳いで
はいけません。高まきをするのですが右岸では高くまきすぎるので左岸
がよい。ただし一見しただけではその左岸の高まき道がわかりにくい。岩壁の登りやすい所をよく探すことだ。道がついている。廊下沢出合付近では広い河原になっている。昔、自然湖が





あった辺りではないだろうか。上の黒ピンガは岩壁がとてもよい。その魅力的な岩を登った人がいるらしいザイルが残されている。金作谷出合はその名が谷となっているように沢よりはおだやかな出合である。そこから上流をみるとかなり長い廊下となっている。右岸を高まく。おりる所は滝の上部を渡りすぐに下る。この辺りは徒渉と高まきを二度連続して行う、この後右岸をずっと歩くただし高まきが数回ある。立石付近の岩はみごとである。立石奇岩もおもしろい。また対岸のすだれ状の滝もきれいである。この後は大東新道までは困難な所はない。ただし新道へ出る前に二回徒渉をすることになる。

薬師小屋から上流は黒部川の源頭部とでもいおうか、かなり穏やかになる。たのしく歩くにはこの方がよい。歩く人も多いらしくまき道がしっかりついている。けしきも女性向きのようで、一日つり糸をたれるにはとてもいい。源頭部は当然ながら水量も減り徒渉もとても楽になる。もう綾線も近い。

黒部川　上ノ廊下

日程　昭和五十五年七月二十四～七月三十日

★コースタイム編

佐藤　通

7月25日

7:30 扇沢
｜
7:50
黒部ダム
8:00
｜
10:15 平ノ渡
11:15 （ランチ）
｜
13:00
東沢出合
14:00
｜
16:00
下の黒ピンガ
17:00 ◢◣

7月26日

6:15 下ノ黒ピンガ
｜
8:10 口元ノタル沢出合
｜
11:45 廊下ノ沢出合
｜
12:00 4.6 km（東沢出合より）
12:45 ランチ
｜
15:05 6.7 km
15:10
｜
15:20 金作谷出合
15:25
｜
7.8 km
うす暗い時間 ◢◣

7月27日

2:00 （真夜中）増水のため河原冠水◢◣移動
11:00 まで川の様子をうかがう
11:45 出発
｜
13:15 海抜 1692m
13:45
｜
14:50 赤牛沢出合
｜
15:00
立石
15:10
｜
立石奇岩 ◢◣

7月28日

5:30 立石奇岩
｜
10:10 大東新道
11:00
｜
11:50 薬師沢小屋
12:00
｜
16:00 五郎沢

7月29日

6:40 五郎沢出合
｜
7:45 海抜 223m
｜
8:45 雲の平への
9:10 登山道
｜
9:40 三俣小屋
10:15
｜
11:45 双六小屋 ◢◣

7月30日

5:05 ◢◣
｜
7:55
槍ケ岳肩の小屋
8:35
｜
11:35
横尾
12:15
｜
14:10 上高地

「懲りもせず黒部源流」

田中広志

昨年は悪天に行く手を阻まれた黒部川上ノ廊下の遡行を再度挑戦ということで、私と佐藤通は、黒部川を源流までつめて、裏銀座縦走という計画を立てたのでした。

このコースは技術的な要素を多分に含んでいるが、それ以上に天候の具合という、自然的な因子が大きく影響する。要するに一度雨が降れば薬師岳のカールを代表とする永河地形により雨水は集められ、すり鉢の底にあたる黒部川の水は瞬時にして増水するのである。そんなわけで前回は、口モトのタル沢手前で増水にあい、廃道となった高天ケ原新道を通って引返したのだった。

今回も前回と同様、黒部ダムサイトから歩き初める。平ノ渡十時の渡船にまにあうように、かなりのペースで進む。二度目ということで、アプローチはまだ記憶の中にあり良くわかるが、深く入り込む沢を回るのには閉口、途中、佐藤は調子が出ずにおくれぎみ、しかし、十時の船にはなんとかまにあった。時間的には十分ほど遅れてしまったが、乗客が多かったため何度か往復していたので対岸に渡ることができた。ここで他のパーティに水をもらいランチを採る。少しバテてきたころには、湖もくびれてきて広い河原が開けてくる。ようやく東沢出合に到着である。いよいよ、雪渓の源流遡行の初まりである。前回より水が多い。沢歩きスタイルに足をかためて先ず東沢を徒渉。釣り人を横目に距離をかせぐ。もう七月というのに水は、やはり冷く、辛い。しばらく右岸を行き見憶えのある景色の中を「去年の流れとだいぶ違うなあ」と互いに言いながら歩く。そのうち左岸に渡らねばならなくなり、何度か試みるのだが、うまくいかず、荷をおろして、ザイルを体に結び試みたが、やはりだめで、胸までつかる徒渉に、長時間、ものの一～二分であるが、水につかる冷たさと流れの強さでくじけてしまう。しかたなく、この日は、そこの河原で幕営、僕などは、数回ものトライアルで体が冷えガタガタガタガタ…たき火にあたりならが三十分ほどふるえていたのだった。

七月二十六日、朝はすずしいというよりは、寒いほどで、まず初めに徒渉である。体もあったまっていないのに水につかるのは苦痛である。しかしここは覚悟を決めて、ザックをおろし、ザイルを体に結びつけてうまく渡たることができたが、下流に流されるようにして渡る。今度はザックをザイルで運ぶのに時間がかかってしまう。しばらく進むと下ノ黒ビンガに入る。左右の垂直な壁をさらに進むと右岸に口モトのタルが流れ込む、この少し先で五人ほどのパーティーに追いつく。いったん右岸に渡り、両岸が迫っている岩壁を左岸に渡り、高まく。五人パーティ

は我々よりずっと上の方の対岸をまいていた。広河原でランチを取り、上ノ黒ピンガに入る。左右が壁は高く迫っているのだが底は河原になっているので何度かの徒渉で通り抜けられる。しかし、ここで、僕は足をすべらせて流されてしまった。通の後を同じように渡ったのであるが、山の子と同じようにはいかなかった。調子の悪いタビのせいもあって足をすべらせ、バランスをくずし、かがみ込んでしまうと、もう流れには負けていた。右岸が深い瀞になっていて足がとどかない。左岸へ泳ごうにもザックがじゃまでどうしようもない。ただ流れに身をまかせるだけだった。通は、すばやくザックをおろし、ザイルを持って今渡った場所を走り抜けておいかけてきた。幸にもしばらく流されると流れが変って足がつくようになりどうにか、左岸に着いた。「アアおどろいた」と僕は呟いた。しかし本当は、以外と冷静に「あまり流されると引き返すのが大変だ」と思っていたのだった。ザックがまだ水を吸ってなかったため浮き袋がわりになっていたので、おぼれるとは思わなかった。それよりも水の冷たさの方がこたえた。心臓麻卑でも不思義ではないだろう。同じ箇所をもう一度渡るときに、通が、「ザイル使うか」と声をかけた。僕は強がりを言って断わり、難なく渡り切った。しかし、相当なプレッシャーがかかっていたのでした。

金作谷を越えて、右岸をかなり登ったガレ場を注意深く進み、流れが蛇行している所で徒渉。ザイルを使い、何回かのトライアルの後、渡り切って、ザックを回収し、そこで幕営。食事とともに雨が降ってきた。まだあまり強くなかったので、そのままシュラフに入り込んだ。夜半、通が、増水のためテントを徹退させようといったのだが、僕は、彼の顔色と、快適とはいえないが、まあまあの眠りの中からは事態の急要さは感じなかった。しかしテントの外、目の前を流れる濁流とテント内の浸水を知って、（僕はエアマットを使用していた。）荷物をまとめたのだった。雨は以前とし降り続き、少し上った所でテントを頭からかぶった。（実はツエルトなんですが）この場所も長つづきはせず、石の流される音がぶきみに響く闇の中を一段高い岩の上へ移つり、そのまま一晩明かした。通は、明方近くなると外へ出ていき、火を作っている。彼は火を作るのがうまい、本能的なものでしょうか。

七月二十七日は、何もかもずぶ濡れで始まった。雨は一応上っているのだが、増水がもう少し回復しないことには進めない。しかたなく、火にあたりながら服をかわかしたり、食事とったりした。このころ食料計画のずさんさが発覚してきた。二人でアルファ米一袋では足らないとか非常食が足りないとか、軽量化を考慮しすぎた計画と徹夜明けのぼけた頭で食購に望んだことが原因で、通は全々関与していなかった。昼ごろには、どうにか前進を決めて、左岸を高まきし、すぐ徒渉、えらく時間をくってしまい、その後は右岸を進む。

立石の手前では、高まきでよじ登っていたら、草つきのもろい岩はだ

にホールドもろともすべり落ちてしまった。三メートル位だったが、ちょうどテラスのはじくらいで止まりさらに下の流れの中には落ちずに済んだ。通にザイルをたらしてもらい、そこを通過。やはりザックを背負っていると勝手が違う、無理は禁物である。右岸ぞいにずっと進んで立石の奇石の所で幕営。ここはなかなか感じのいい所です。薬師岳の斜面からスダレ状の滝が落ち、右岸はへんてこな独立岩がそそり立っています。

七月二十八日、この辺りまでくると、もう峠を越した感もあり、だいぶ楽になってくる。ずうっと右岸を行く。大きな高まきで岩壁の上部に出てしまい、ルート探しや、懸垂下降で降りるのに時間がかかった他は、順調に進み、岩魚釣りの竿を持った人が大東新道の近いことを知せてくれる。分岐点付近には、釣り人や、高天ケ原へ行く人々がやたら多い。ここから、薬師沢出合までは、道も整備され歩きやすい。つり橋を渡って難なく薬師沢小屋に到着。ここもえらく人が多い。河原でランチをとり再び人のいない源流へと足を運ぶ。ずっと左岸を行き、小さな高まきを繰り返し、しばらくして赤木沢をちょっとまわり込んで徒渉。このあたりから雲が低くなり小雨まじりの中を進む、源流を少し離れると、湿原があったり、源流を見下ろせるような所にでたりするのだが、雨の中だと足早に通り過ぎるだけになってしまうのがとても惜しい。

僕がつかれだし、腹もへってきたので、五郎沢の出合で幕営。川幅も広いし、かなり上流に来たということで増水の危険は一応少なくなった。

七月二十九日、天気くもり、源流はすっかりおとなしくなり、上ノ廊下のあの力強さは感じられない。大きな岩の上を飛びこえながら行くとやがて縦走路につきあたる。ここも人が多勢休んでいる。この上部はまだ雪渓になっているので源流歩きはここで終りということになる。この後は天気も悪いし、食料もないしということで直行で帰ることにした。伊藤新道は橋が落ちたので通行不能だそうで、裏銀座を回る。その日は双六に泊り、翌日は槍を越え、上高地までかけ降り、夕方には、車中の人になっていたのだった。

この山行は、決して天候には恵まれたわけではないが、どうにか源流をつめることができ、無事帰れたのは、ラッキーだったと思う。また、OB会らしくない山行になってしまった。いかん。

相模川・川下り・PART I

昭和55年8月3日

諏訪部　信一

八月三日、朝、目がさめると、外は雨が降っているようである。相模川の川下りは、計画以来二年目になっていた。本日のクルーは河本君、

サポートを萩原君の予定で、河本君はすでに昨晩より、家にとまり込んでいるのである。雨はそれほどの降りではない。萩原が到着、雨は少し強くなって来た。三名協議の結果、一応川まで行くこととする。駅よりタクシーで行く事とするが、タクシーに乗った時はひどい降りであった。小倉橋へ着く頃、天候は少しよくなり、小倉橋上流より川へ出る。我々の装備はゴムボート、三重のビニール袋に入れた昼食、コーラー、カメラ、衣類、海水パンツにスニーカー、その上からナイロンのカッパを着けての出発である。さすがに水温は暖かい。川岸にそってサポートする萩原に別れて、川の中央へ出る。しかし、川の流れはゆったりとしていて、ボートはちっとも前へ進まない。しかたがないので、オールでこぐ事とする。小倉橋の下をすぎると鮎釣りの人達の間を通り水路へと出る。流れが多少あり、オールは不要となる。しかし、思わぬ伏兵があった。水面下にあるテトラポットである。流れの為、よほど注意していないとボートの底が当ってしまう。河本君と二人で前方に注意をするが、二つばかり、ひっかけてしまう。テトラポットの先端には鉄筋が露出している為、ボートの底に穴があいてしまう。修理の為、岸へ上がるが、ガムテープを置いて来てしまったのに気がつき、そのまま再度出発、多少水が入ってくるが、ゴムボートの為、沈む事はなさそうである。

少し下ると、テトラポットによる堰がある。右手は階段状になっているグループがあった。しかも、その人達が何かさかんに言っている。為、左手にまわり、テトラポットのきわで、ボートよりおりる。ボートを引いて、下へおりようとする。その時、河本君がテトラの間へもぐりこんでしまう。ピショ濡れになって出て来て、二人とも大笑い。やっとこボートを下へ降す。岸辺を歩いているはずの萩原の姿は見えない。再度、流れの中へスタート、急流をすぎると大島のキャンプ場である。一部浅瀬になっている為、川の中をボートを引っぱって歩く事とする。雨がやんで、だいぶ明るくなって来た。キャンプ場の横をすぎるが、雨の日のキャンプ場は静かである。もっとも、雨とは言っても、松林の中には多数のテントがあって、子供達が出たり、入ったりしている。我々も、びしょ濡れの為、身体を暖かくしたいところである。朝、早起きした為おなかもへったので、おにぎりを出す。おにぎりは水の中。三重に包んだのに、袋の中は水だらけ。シャツやパンツも水だらけ。かなしいけれど、あきらめも必要。おにぎりは、すべて口に入ることなく、川の底へ落ちていった。食料がないとなると急におなかがすくものである。岸辺を見ても萩原君はいないし。そんな事をしているうちにも、ボートは少しづつ下流へ。幅の狭い所では、雨のせいもあってかなりのスピードが出る。急流は気持ちよく通過。このころになると、ボートの操作にも余裕が出てくる。再度流れがゆるくなると田名である。オールを使ってこぐ。しかし、おなかがすいたな。その時、岸にバーベキューをやっているグループがあった。しかも、その人達が何かさかんに言っている。岸へボートをつけると、そこには、バーベキューのプレゼントがまって

いたのである。びしょ濡れの我々は火にあたり、バーベキューをパクパク、ビールをグイグイ。その美味なる事、最高の味であった。小一時間の休息後、再出発。岸辺の人に見送りを受けての出発である。オールで一こぎすれば田名の堰提である。堰へ接岸して、ボートを引っぱり上げて、下へおろし、あたりを見ると、いました、いました萩原君。我々を待つこと一時間との事。彼は、愛妻の作ってくれた弁当を食べたとの事岸辺を歩くと言っても、我々互いに見える場所とはいかないので、集合地点を決定する。この次の集合地点は昭和橋。河本君と私はまたボートに乗って出発。高田橋の下をすぎ、流れに乗って下る。時々、水路が分岐していることがある。正確な地図のない我々は、どちらへ行ったら良いのか非常にまよってしまう。再度合流するとはかぎらない。流れを見ながら、本流をさがして進むしか手はないのである。雨と言うのに、釣人が多くいる。声をかけながら通過するが、ボートはまっすぐ進むとはかぎらない。釣り針はゴムボートには強敵である。雨がまた降って来る。もっとも、少しぐらいの雨は気にもならない。水道橋が見えて来る。続いて新昭和橋。オールをこぐと、昭和橋である。橋の上に萩原君が見える。橋を通過、橋をくぐると急流がある。今までのコースで一番おもしろそうである。一気に中央へ進む。ボートはしぶきを上げながら進んで、あっと言うまに、もとの静かな流れにもどってしまう。接岸して、萩原君と合流、今後の予定を話し合うが、天候は小雨の為、強行することにする。再度、川の中へ。ところが出発して十分程たつと、雨は強く降りはじめて来た。これから下流へ行くと中止するのがむずかしくなると判断、岸辺を歩いている萩原君に合図をして、接岸し、再度協議をする。結果は中止とすることに決定。ズブ濡れの河本君と僕は、ボートを引き上げ、空気を抜くと、ザックの中に入れてバス停へ。橋本の家へ帰り付くまで、バスにすわると、シートはビショリ。しかし、何とも楽しい一日なのであった。

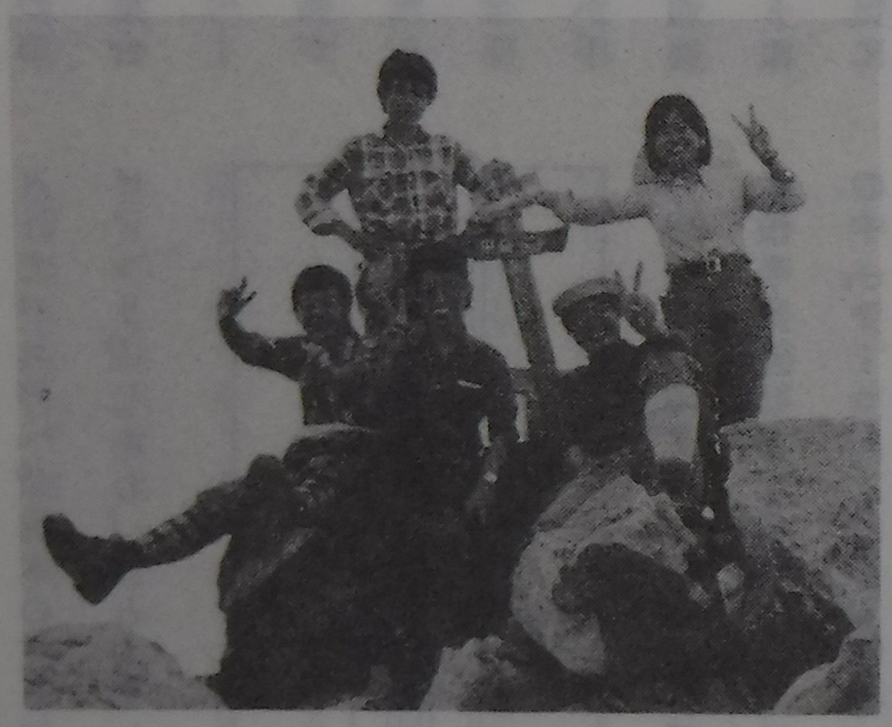
南アルプス回想

井上京子

初めての南アルプス雨の白峰三山
高校卒業後初めての夏合宿なのに景色は見えず霧雨の中歩き続けた風雨の中「キーコ、しっかり」とパチッ!! 忘れられない有難とう!!
でも暖かかったヒトの心
小屋のおにいちゃん、おもしろいネ
翌年が三伏峠から塩見・北岳へ笑い転げて疲れの何処へ飛んでって
お日様ニコニコ
埋まってしまうほどのお花畑ワァーイ!

忘れられない塩見岳の姿、好きだなぁ
しばらく山とも御無沙汰して
勤めて二年目!!
久々の南アは甲斐駒・仙丈岳参ったの一言、バテバテ山行
よく寝てよく食べる事の大切さ痛感!　仙塩尾根は長かった
ミヤマトリガブトの花が続いていた
両俣で会った飲んべえのお二人　今はどうしているだろう
四度目が前年のやり残し
両俣から北岳そして再度白峰三山　大所帯のワイワイガヤガヤ山行
雲が空をかけていった
そして今回、憧れの南部縦走、でも私にとっては最大の難所
恐怖に不安に自信の無さがプラスで迷いに迷った末の参加
この機を逃したら、二度と南部には入れない気がして
そして、何とか肩の荷物を投げ出さず、自分の足で歩けたこと
やっぱり、とてもとても嬉しくて南アではお馴染みのS氏
何年かぶりに南アでごいっしょH氏
若手組、昨年に続いて同行のE・K氏、二人は今後が期待されます
南アの山乞食になるか否か
皆様たいへんお世話になりました。四人の方々ありがとさんなのです。

恐怖の畑薙の大吊り橋



キャーキャー言いながらも
以外とあっさり渡れてしまった
ウソッコ沢のおじさん
美味しいお茶　御馳走さま
最初のピークは茶臼岳
上河内岳越えて憧れの聖岳三〇一〇米
薄いベールにおおわれた Mt. Fuji
美しかった聖岳での朝の風景
兎岳ー今でも名の由来不明
ヒィヒィ言いながらの中盛丸山
どっしりして抱容力を感じる
本当に大きな赤石岳三一二〇米
南斜面は一面のお花畑
北斜面は無惨に崩壊を続けている
対象的な両面をもつ荒川岳
(前岳三〇八〇米、中岳三〇八三米)
ふり返って荒川岳の眺めが Goodの
小河内岳
最後のピークは鳥帽子岳
下れば懐しの三伏峠

いつもながら南アの山々は大きい、そして、どこもかしこも花はなハナ
感激の一番はマツムシソウ
本当にこんなにたくさん見たのは初体験…スゴイのなんのって!!
初体験はもう一つ
あんなに一日で登ったり、せっかく三〇〇〇米まで上っても
あっという間に森林限界以下まで下ってしまって、あーもったいない
エレベーターじゃあるまいし

南アもこれでひと段落かな?!
でもお山とのお付き合いはこれでおサラバなんて無理なお話

相模川・川下りPART Ⅱ

昭和55年8月10日

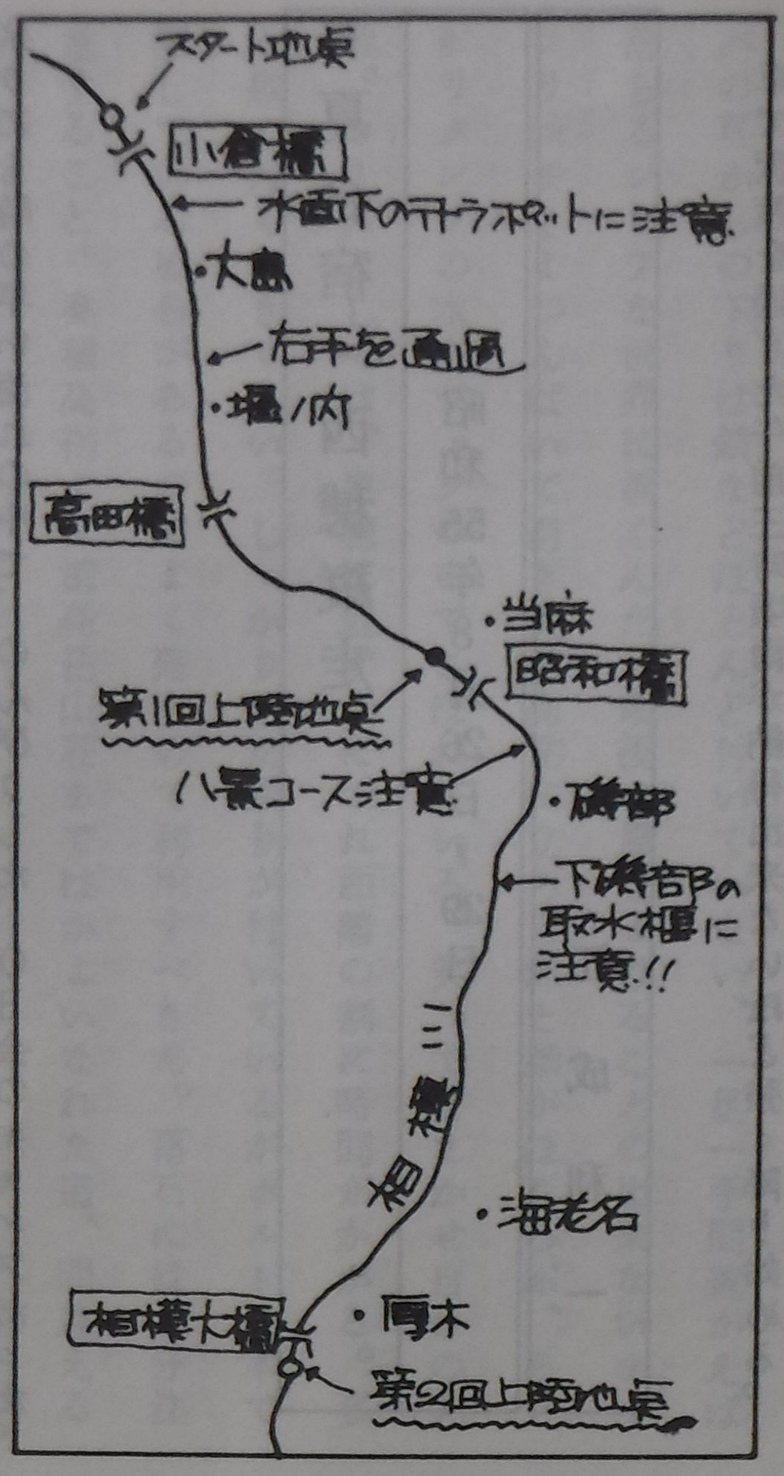
諏訪部　信一

十時を過ぎた。今日は中止かなっと、一人で考える。小沢君がまだ来ない。川下りは一人では無理である。八月十日、天候は晴れ。第一回の先週に引き続いての挑戦である。小沢君が来た。二人で駅へ行って、タクシーに乗り、小倉橋へ。今日は、早朝出発したいところであったが、十時を過ぎた。今日は中止かなっと、一人で考える。小沢君がまだ来ない。川下りは一人では無理である。八月十日、天候は晴れ。第一回の先週に引き続いての挑戦である。小沢君が来た。二人で駅へ行って、タクシーに乗り、小倉橋へ。小倉橋着の後、準備をして、出発したのが十一時。前回同様の地点からのスタートである。今回は陸上サポートがない為、準備は出来るだけ少なくし、前回失敗した荷物の防水も万全を期した。小倉橋から大島キャンプ場へ、そして古清水へと順調に進んで行く。そろそろ前回の昼食場所、田名と思っている時である。少し近道をしようと思って、ボートを左側の分岐へ入れる。これが失敗であった。急に狭い流れとなり、流されていくと、広いよどんだ場所へ出てしまった。水は静かに流れている。二人で一生懸命にオールをこぐ。前回のコースとまったく違う。ゆっくり進んで行くと、人の声が聞こえて来る。ところが、近くへ行って見る



と水門があるではないか。完全にアウト。堰に接岸して、水門を見ると通過はとても無理。左右を見わたしてもすぐには流れは見えない。しかし足元を見ると、葦の茂った原と思ったのは、テトラポットの原で、下を水が流れている。二人でボートをかつぎ上げて葦の中を、ボートを頭の上に乗せて進む。足もとはテトラポットの為、思うようには進まない。それでも何とか水のあるところへ着き、ボートをおろし、乗り込む。一路田名へ。田名の堰提は水遊びの人達で大にぎわいである。堰に接岸。ボートをかつぎ降す。今日は先週と違って本当に天気が良いなと思いながら釣り人の間を通り、高田橋から昭和橋へと進む。水辺では子供達が水遊びに夢中になり、こちらは流れにのって、オールをこぎこぎ進む。昭和橋を過ぎ、急流をクリアーすると、前回の上陸地点である。今回は考えることもなく通過。いよいよ、相模八景へと入る。ここは、高い所から見ると、水路が網の目のようになって見える。コースをまちがえたら大変である。水の流れを見ながら慎重に進む。巾は広いが、水深の浅いところが多い。おしりがごつごつ岩に当る。八景をすぎると水がよどんで来た。小沢君と二人でオールをこぐ。前方に大きな堰が見える。接岸して、アゼンとなる。なんと、川が無くなっているのである。遠くを見ると、どうやら、我々は右手に寄りすぎたらしい。ボートをかついで川を横断することとする。ところが左手に来て見て、またアゼンとなる。大きな水門やら堰提やらの連続である。下磯部の取水堰である。階段状になっているコンクリートの水路へボートをおろす。ところが、高低差があり、水流が早い為、階段状の水路はうずのすみかみたいなもの。ボートは下へおりずに、うずの中へもぐっていってしまう。大急ぎでボートへ乗りうつろうとするが、深さもあり、足場も悪く、ボートと一緒に流されるばかり、ボートの中は水びたしの上、そのうち、オールや荷物が流れ出してしまった。意を決してボートへ飛び乗り、流れたオールや荷物を追いかけるしまつ。周囲にいた釣り人が、いくつかをひろってくれたから事なきを得たが、一時はボートと共に川のもくずとなりかねない状態であった。思わぬアクシデントの為、心身共にグッタリとつかれ一方では興奮がさめずに川下りを続行するのであった。下磯部の堰提は非常にスリリングなものであったが、一歩まちがえたら本当に危険なものであった。堰接をすぎると川もおだやかになり、ゆったりと進んで行くと、新相模大橋が見えて来る。いよいよ厚木である。出発時間が遅かった為、夕方近くとなり、時間が気になる。出来れば、平塚までと思っていた川下りではあるが、とても無理になって来た。小沢君と厚木までは行く事を決定して、二人でがんばる。流れのゆるやかな川は、オールでこいでも思うようには進まない。新相模大橋を過ぎると、川も何となく、よごれが目に付くようになり、今までの感じと違って、町のにおいがただようようになって来る。川はゆっくりと流れ、右手より中津川が合流すると、相模大橋が見えて来る。街にはあかりがつきはじめ、小田

急線の音の聞こえてくる。夕涼みの人達のいる相模大橋のふもとに無事上陸、時間は約六時三十分頃。小倉橋からの所用時間は約七時間三十分であった。相模川、小倉橋より下流の三分の二を下ったことになるが早朝より開始すれば平塚までの全コースを一日で下る事も可能と思われる。ただ、厚木より下流は流れもゆったりとなる為、スピードは出ないと思われ、オールによって進む事が多くなると考えられる。



'80年・夏・キャンプ

昭和55年8月23日～24日

新津正己

夜、コンスケと平田とボクの三人は、シビックで神ノ川へと向かった。林道へはいると、車は上下に大きく揺れて、腹を何回も路面にぶつけた。コンスケはその度に悲鳴をあげ、〝やだあ〟〝バカ〟とかわめいた。しかし、運転は変わってあげないヨ、何が起きてもボクの車じゃあない。もう少しで怒りが爆発する寸前で闇の中に長者舎のたたずまいが現れた。車を止めて、荷物を持って三人は河原の中にある一点の灯りへ向かった。水の流れを越え、石を踏んで、灯りに近づくと様々な顔が浮び上がった。火の上には焼き肉があって、みんなの頭上には雨除けのシートがあった。先輩と後輩なのに、なぜか同棲してるスワベさんと千秋さんが笑ってた。その上、娘が一人いるなんて、十年前には、少ししか想像できなかった。久しぶりに会ったテツちゃんは相変らずアホで、本当に結婚するんかね。モンタさんやノンちゃんも居て、もう酒を飲んでいい気分になっていた。むずかしい話でいつもボクを困まらせる秋山も、目の周りを赤くしてた。次の行動が想像つかない小沢は、ひとりギターを弾いて唄をうたってた。色気より喰い気のコンスケは、若い男会員に目もくれず口を動かしてた。髪が伸びて、大人っぽくなった平田はユースで知り会った彼の話をした。カメラを持ってニヤニヤしてるトオルは、モ〇コの影を追い求めていた。愛人榎田を残して単身参加の川嶋はまめに焼き肉を引っくり返えしてた。六本木のクルージングは週末とはいえ、山奥まで来て男を探し求めてた。登場人物からもれてしまった人、もっと印象に残る行動をとりましょう。

夏合宿・西穂縦走

昭和55年8月26日～29日

江成利一

鉄板に焼きそばが投げ込まれ、ウイスキーがのどを流れ、夜は更けていく。

翌朝、飛び散ったピーナツ、転がったグラスを片付ける、わびしい。

トマトとキュウリのサラダとフランスパンの軽い朝食をとり、横になる。

河原をバイクで走ったり、無駄話をしたして、後片付けをして帰り仕度

帰りもこりずにシビックを痛め、コンスケに新車購入の決断をあたえた。

余りにも時の早い流れの中で、のんびりした、ＯＢ会のキャンプだった。

車で沢渡を過ぎた午前三時頃雨が納得出来ないほど強く降り始める。

先パイと俺、沈黙の時間が長くつづいた。

夜が明けると雲の切れ目から青空が見えた。雨あがりの心ちよい風を

受けながら予定通り上高地を出発する。前からメッチェンがせまって来

るはずもなく男二人色気ぬきの山行が朝飯ぬきで始まった。登るにつれ

空腹と夜行疲れが体に応える。ガッツ一時間、水場での朝食満足にめし

がのどを通らない朝食は行動する前に食べておくべきだ。やっと西穂山

荘に着く、ひたすら登った三時間おもいのほかきつい登りで思いだした

くない。さっそくテントを張るダンロップテントはとても張りやすいが、

テントを固定する方法をもう少し考えてもらいたい。山荘でのビールは

三百八十円。夕刻よりガスがますます深くなり飛騨側より風が強く吹き

始める。心のどこかでコースの変更を考えるが互いにそれを悟られない

よう顔が笑う。おやすみなさい。風の音が気になりなかなか眠れない。

やがて明日の健闘と天候の回復を祈りながら眠ってしまった。

午前三時半起床、俺の不撓不屈の根性により天候は一変、空は星で一

面輝いていた。昨日の悲観的な考えは消えて心はずむ思いをおぼえる。

日の出前に出発長い一日がはじまる。太陽に照らし出された巨大な穂高

岳に向けて登る下る登るの繰り返しの楽しい山登りが三百六十度の展望

と共につづく、途中で好運にもブロッケンを見る事が出来た。ガスがわ







きだす。西穂高岳からが本番、ピーク一つ一つが面倒臭く時間がかかる様になって来た。山では色々な人と気軽に話しをする。礼儀をしらないマスダチック的おじんがやたらと地理に詳しい先パイに絡んでくる。さいわい俺は地理にうといので相手にされなかった。前にある小さなピークそれがジャンダルムだと言う事なので、荷をおろして登る。まぎれもなくジャンダルムの頭だ。奥穂高岳がすぐ正面にあるあと一息だ。ロバの耳からの下りは鎖などほとんど付いていない、一足一手間違えば落ちるシビアな世界に涙ぐんだ。最後の風をよけることの出来ないナイフリッチをよつんばいで過ぎ奥穂高岳に立ち自然と顔がほころぶ、あ！ポリタンクの水がザックの中でこぼれている。笑ってごまかせ自分の失敗。コースとしては、奥穂に近ずくにつれ距離の割に時間がかかる。多人数で行くべきでない。しっかりした鎖りが付いているがボルト一本で配している場合があるのでよく確かめて利用すべきだ。落石には十分注意すること。奥穂高岳より穂高岳山荘まではかよいなれた道、問違えるはずがない。最後のハシゴの所ではミシンを踏んでしまった。穂高岳山荘の所で幕営、テント十張ぐらいは張れる。十五時には満張となった。隣のテントは外人のねいちゃんで、トレッキング風にホットパンツで歩いている。その白い肌がとてもセクシーでした。本日とても天候に恵まれたラッキーな一日でした。心地よい疲労が眠りをさそう。おやすみ。

下山の日、午前三時四十五分起床、小雨の中を前穂高岳へ向う。前穂高岳頂上「雨」視界なしの荒涼たる一角である。晴れていたらどんなにすばらしい山頂であったであろうか、相像すること数分、あきらめて山頂を下る。雨は山頂にかかるガスの地域的なものであった。下るにつれ山はだんだん大きく見えてくる。上高地はアスファルトジャングルを逃れて来たピープルたちでうめつくしている。その中に芸のしらない岳人たちが大きな顔をして歩いているがとてもみぐるしい。「カンパイ！ビールがうまい。」次の目標六百山への思いは募り心ひきしまる。

以上コース西穂より前穂、日程八月二十六日より八月二十九日、メンバー倉地先パイと俺による報告書でした。おつかれさまでした。

追伸、観光シーズンに男二人で上高地を歩くものではない。





優雅な大名旅行・上越の山

昭和55年9月13日～15日

諏訪部　信一

私は今回初め、こんなぜいたくな山行をさせてもらった。なにしろ、行きも帰りも運転手付のデラックスバスでの山行である。夜、私の家の前には、OB会のメンバーがうろうろしていた。私、千秋さん、倉地氏、萩原氏、秋山氏、井上㈜さん、小宮氏、平田さん、佐藤氏の十名である。昭和五六年九月十三日、夕方、買い出しも終って、準備完了、家の前には十人乗りのデラックスバスが来て出発を持っていた。十名中免許証を持っているのは七名である。だれが運転するかと言う事で、普通は、運転手はきみだ、車掌は僕だと言うように、人に運転をまかせがちであるが、当、OB会は卒先遂行のグループである。若い人達が、運転をしてくれる事になった。第一番手は小沢氏、七名の乗客と二名の交替要員を乗せて、一路苗場を目ざしたのであった。国道十六号線を八王子から川越へ。車は順調、車内は和気あいあいとして、非常に楽しい気分であった。列車と違って座席もゆったりしているし、他人を気にしなくてもすむし、欠点と言えばトイレがない事ぐらいである。出発して、一時間半ぐらいがたち、寝るには早いし、ちょっとトイレへ行きたいなどと思っていると、車の前に赤い旗を持った人が飛び出して来た。危ないですよ。車は急には止まれないですよ。と思っていると、さすが小沢氏、さっとブレーキを踏んで、車を左側へ、その人も赤い旗を持って、また歩道へ入って行きます。我らが車は左側の消防署の駐車場へ。トイレ駐車？いえいえ、これはスピード違反なのです。そうなんですよ、川崎さん。A地点を通過した時のスピードをB地点で取り締ると言う。すると、これは俗に言うネズミ取りですか。山本さん。小沢氏はショボン。我々は消防署へ行って、トイレの用をたして、それでもめげずに出発。私はその後は知りません。冷房のきいた快適な車内、ここちよい振動、私が気がついたら、車は深い霧の中を走っていました。

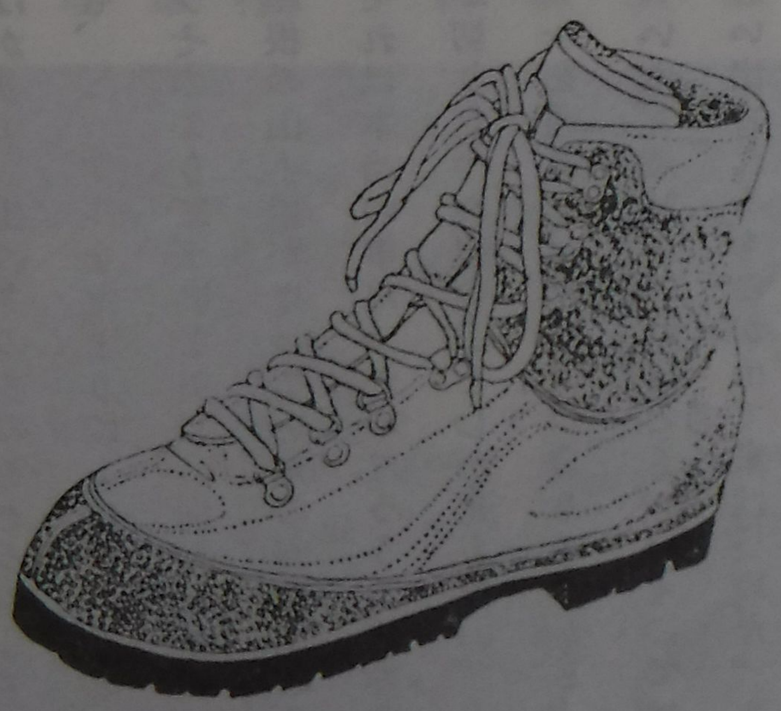


国道からはずれて、少し行った所で小休止。当初、車を置いて、登頂後、車を取りに来る予定だったので、

車を置ける場所をさがす事としました。しかし、現地には、車を置けるような、適当な場所もなく、協議の結果、二グループに分れて、一グループは神楽峰から苗場山を経て赤湯へ、別のグループは車で赤湯へアプローチ、林道の終点へ車を置いてしました。車の回送とも思えるグループには若手三名が行って来れる事になり、我々中年グループはバスの終点まで送ってもらう事になりました。バスの終点で装備を分担すると、若手三名と分れて、神楽峰グループ七名は林道を進んで、一路、神楽峰へと向ったのです。途中で朝食のなべやきうどんを食べて、後から来た他の登山者と一緒に神楽峰へ。附近は、みつまた高原スキー場になっている為、最初のうちはスキーゲレンデそのものを登って行く事となりましたが、九月の上越の朝の風は気持ちのよい、すがすがしさを持って、我々に吹いてくれました。高さが増す毎に、盛夏から初秋へと変わる、山の姿に見とれながら登って行くと神楽峰の山頂はすぐそこです。稜線でL1として、心は、その間も苗場へ。ところが、L1の時に問題が起ったのです。ハムがないのです。そうなんですよ。本来ならば入ってなくてはならないハムが、だれのザックを見ても入ってない。これは問題なんですね。川崎さん。全員のザックを調査した結果、結論的には赤湯めざして、降りるばかりである。ヒザが笑いはじめ、もう歩くの究明は、現在もまだなされていないと言う事なんですよ。と言う事がありまして、無事　L1は終了いたしました。私は一度苗場山へ来た事が

春、それも言葉ばかりで、山は冬の衣のままの四月下旬に。その時、アイゼンをきしませ、ピッケルをたよりによじ登った苗場山の山頂は、それまでの急登がうそのように平坦な美しい別天地であった。白一色の平原の中に、赤い屋根の山小屋が立っていたのが記憶の片すみにやきついているのだが、それは本当の事だったのだろうか。神楽峰の稜線から見る苗場山は周囲が切り立った崖の山としか見えない。我々は神楽峰から一気に降ると、コルを通過し、苗場山の登りにかかる。急な登りであるが、ジグザグについた夏道は、それほどきついものではない。

五時をまわっていたと思う。テラックスバスで来たとは言え、早朝より
の山行で、いささかガックリ来ていた私であるが、赤湯へ着くと非常に
楽しい事が待っていた。温泉であるが。それも露天風呂なのである。河原
のところにコンクリートでかためた浴槽があり、だれでも自由に（本当
はペテランな人達だったものですから、充分、その機能ははたせたと言
う事なんですね。と言う訳で、我々の吊り下げテントは道を行く他の登
音を気きながら温泉に入る。これは疲れた身体にとって最高のものであ
る。一度テントへ行って、ビールで乾杯、荷物を置いて、食事の準備を
手伝って、それから温泉へ、河原の大きな石の上へ洋服を置いて、湯舟
へ飛び込む。近くで女性の声がする。一つ一つの湯舟は大きくないが、
いくつかの湯舟があり、多少、温泉の種類が異っているとの事。夕暮れ
時の光の中で、今日一日の山行を思い出しながら、川の水音を聞きなが
ら、遠くの湯舟の湯気の中に女性の姿をかいま見ながら入る温泉は、本
当に、最高のものであった。温泉はこれくらいにして、私がさきほど着
いたテント。これが、また怪奇な姿をしていた。テント場は山道のはし
の小さな土地にあって、うっかりすると、道にはみ出してしまうほど、
狭い所であったが、そこにあって、我々のテントは独特のスタイルをし
ていた。これは、このテントを搬入し、設営したA氏の談話によります
と、搬入後、テントのポールが無い事に気がついたと言うんですね。す
ると、そのテントにはポールが無かった？そうなんですよ、川崎さん。
そして、B氏の証言によりますと、ポールがない為、ロープをつかって、
附近の木より吊り下げたと言う訳なんですね。しかし、そのような状態
で、テントとしての機能は発揮出来るものなんですか？山本さん。そう
なんですよ、川崎さん。ところがですね。幸いな事に、そのような事に
うまったが、裏道作戦により夕方七時には、相模原の自宅へ到着。かくして
優雅な山行の幕は降りたのであった。



西丹沢・ザンザ洞

昭和55年9月20日～21日

川嶌　菊夫

20日　21:00　カリーナ号、スターレット号に分乗して江成金物店（相模原ポロ横　ドウゾヨロシク！）前より出発。ユーシンロッジ手前にテントを張り夜遅いのにもめげずにOB会らしく酒盛りをする。誰だ！四人用テントに六人用テントのポールを持ってきたのは？

21日　暑い日だった。（としておきたい。なぜかはいずれわかる。本当は肌寒い日だった。）

八時より行動開始。ユーシンロッジ前を通りザンザ洞へと向かう。ちょっと体がアルコール臭い。アケビを発見！流石に山の子佐藤サン。皆でおいしく食べました。約一名変わった食べ方をした吉田クン。あのバナナのような実を食べずに、まわりの紫色の皮の方を食べたのです。注意されて彼曰く「どうもまずいと思ったら。」

ザンザ洞入り口やっと発見（実際一度道を間違えました）先行パーティがF1の巻き道二ノ沢を登っていたので下で見学。終了したので行こうとしたら、小滝のところで食事をしていた女の子二人（大学生くらい）がやってきたので、こちらは大人数なので先に行ってもらおうとしたら「いいえ、私たちはこちらを行きます」と巻かずにF1をスイスイと登っていってしまった。ああ…みじめ、

今回はワラジ一名　釣用フェルト靴二名、登山靴二名で行ったが、完全にワラジ・フェルトの方が有利である。登山靴組はコケが多いためかすべってしまってかなり苦労したが、ワラジ・フェルトはほとんどすべらずに楽であった。（一部を除いて）

しかし、悲劇はF4ナメ滝で起こった。佐藤サンはいい調子で右側より登って行ってしまったので、私も榎田クンもフェルト・ワラジであるのでその後に続いた。とその時、左側から登っていた小沢サンがずるずるずるずると約四米ほど落ちた。下が岩だったが手をすりむいただけですんだ。自分も気をつけなければと思いつつ登る。もう少しでやや平らになる所まで来たとき、踏み出した足がちょっとすべったので、「やばいな」と思ったが、慎重にもう一度踏み出したとたん重力に従っていた。と突然目の前は水であった。そうなんです。滝の下の釜に落っこちたんです。落ちた距離約五米。平然と私が落ちるのをすぐ横にいて見守ってくれた榎田クンは、私の落ちた地点は十分に注意して落ちずにすんだと思った次の瞬間、彼も水の中に居た。彼は幼小の頃からたいそうすべり台が好きだったらしく、まるですべり台をすべるように尻から落ちていた。（ちょうどプールにあるすべり台をすべるような格好で）気の毒なのは

嶋崎サンで特等席で見物できた変わりに、二回もまともに水を浴びてびっしょりである。本当に暑い日だった。

このコースのメインである大滝に到着。見たとたん巻きたくなった。ポツリと雨粒が落ちてきた。佐藤サンがトップで登っていく。時々下でみていてはらはらするような登り方を平気でする。途中の棚で嶋崎サンがパンツまでびっしょりにしながら確保、そして滝の落ち口で佐藤サンが確保したザイルを頼って順番に登ることにした。順番を待つというのは、試験数分前という感じで非常に落ちつかない。準備運動に屈伸をすると、F4で打った右ヒザが内出血ではれていて痛みでよく曲がらない。こんな状態で大丈夫かなと思いつつも、順番になったのでザイルを信じて登る。思うようなホールドが見つからずに苦労したのを憶えているらいで、何が何だかわからないうちに登り切ってしまった。上から下をのぞいてみると「うわっ」という感じだ。あとはガレ場を登りユーシンへ下ったのであるが、下りで右ヒザがいたくてまいった。

今山行の失敗記録

1. 四人用テントに六人用ポール
2. 吉田クンのアケビ
3. F4の滑落及び水遊び
4. カリーナ号　キーを入れたままドアをロックする

参加者　嶋崎・江成・小沢・佐藤・榎田・川嶋・吉田

救急法講習会

昭和55年10月18日～26日

増田義昭

十月十八日から二十六日まで相模原山岳協会主催による赤十字救急法講習会が開催された。参加者は全部で十八人であった。OB会からは倉地さん、井上京子さん、佐藤君と僕の四人が参加した。講師には神奈川県山岳救助奉仕団の山男たちがあたられた。講師は学科と実技に分かれており、平日は午後六時半から九時まで、土曜日は午後二時から九時まで、日曜日は午前九時から午後九時までビッシリと組まれたプログラムに基づいて実施された。内容は教科書どうりの救急法の講習会、といったところであったが、山男の講師の口からは山での事故の事例が多く飛び出し、皆真剣に、そして楽しく講習に取り組んでいた。

十月十八日、OB会のお月見山行が小倉山で行われる日であり、またこの講習会の開講の日でもあった。

講習の始まる前に、教科書と三角巾と巻軸帯の入った袋を渡された。教科書を開いてみると、なんと百五十ページ余りもある。こんなもん一週間で終るんかいな？これだけの量があると覚えるのもショッパイな、最終日の試験で一人で落ちたらカッコ悪いな、なんて不安がヒシヒシと

僕の小さな胸に広がっていった。

しかし講習が始まるとお月見山へ着く前に酒はなくなってしまわな不安は、今度は僕らがお月見の会いか、料理はなくなってしまわなかないままに初日の講習が終了し

講習が終ると井上さんを除いたバンで小倉山へ直行した。小倉山では明日の朝からの講習も何のその、飲み狂ったのはいうまでもない。

翌日（十九日）は酒臭い息を撒き散らしながら、アルコールで溶けかけた重たい頭をかかえながらの辛い講習になった。自業自得。

その後の講習は真面目に受講し、なんとか最終日までやって来た。遅刻も早退も、もちろん欠席も許されないシビアな講習で、日々緊張の連続。特に実技の三角巾法は規定通りに規定時間内に終了せねばならず、習うより慣れろ、が一番であった。講習前の時間には必らず三角巾の練習が欠かせなかった。

またたく間に講習六日目、最後の講習の日がやって来た。講師から試験の「傾向と対策」についての話しがあり、その後受講生一人一人に対して学科に関する質問が行われた。講師の出す問題が全て試験に出て来そうで大変緊張した。しかも僕はその問題にやっと半分ほど答えられる程度で、学科の力の無さを痛感。その夜はあわててノート整理を行い、

十月二十六日、ついに試験の日がやって来た。午前中は倉地さんの計らいで西門のグリーンバザールの会議室を借りることができ、ＯＢ会の四人が集まって学科の練習を行った。学科は昨日憶えた事だからなんとかなりそうだな、なんて思っていると、井上さんのノートのビッシリ書いてあるのを見てまた不安になった。僕のノートは井上さんのノートの十分の一ぐらいの量だもんな。実技は、好だけはできているといった程度。規定時間はギリギリ、といった感じでこれもまた大きな不安の種だ。しかし、パートナーとの連係プレーでこれをなんとか乗り切ろうと練習する。例えば肩を三角巾で保護する場合、パートナーに肩を前に曲げておいてもらい、終ってから胸を張るようにしてもらえば三角巾がピッと決ってカッコイイ。こんなチョンボを思いついて練習を終る。

いよいよ午後からは試験本番。いつでも試験はいやなものだ。学科が先に行われた。記憶の片隅をほじくり出してなんとか答案の解答欄を埋めていく。解けないところはデッチあげてなんとか全問の解答欄が埋まった。記入が終われば試験場から出てもよいのだが誰も席を立たない。何度も答案用紙を見直してねばった。

試験終了後、教科書をみて一喜一憂は高校時代を思い出す。

その後は実技試験。包帯法、止血法、人工呼吸法、運搬法が一通り行

われた。実技は行動が直接加点されるので一つ一つの動作が分かるようにオーバーアクションでアピールした。三角巾法はパートナーの倉地さんとの連係プレーでなんとかこなした。試験が終ると講評が述べられ、閉講式が行われて解散した。

十一月十九日、「受講者の集」が開かれて試験結果が伝達された。OB会の受講者四人は全員憂愁さ、いや、優秀さを発揮して救急員の適任証を手にすることができた。めでたし、めでたし。

OB会からの参加者四人は、それぞれに救急員適任を認められたわけだが、山にいても、里にいても極力この講習で教えられたことを活用する機会を起さないようにしたいものである。

一人一人があらゆる事故を防止する努力を常にとり続けていかなければ決して遭難事故は後を断たないだろう。事故防止の思想こそが救急法の第一である。起ってしまった事故をとやかく言っても始まらない。しかし事故をいかに軽微に収拾するか、万が一の時それを知らないばかりに大切な身体に、生命に重大な支障が起ったのでは取り返しがつかない。

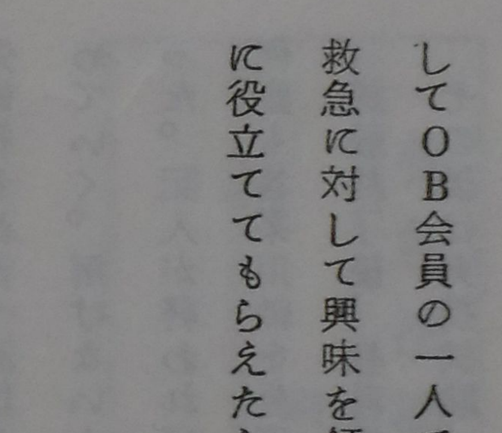
山に登る者として、安全思想を身につけ、万が一の時の心がまえと知識を持ち、勇気と愛情を持って対処することができることはとても大切なことである。こうしたことからOB会員にも今後機会あるごとに私達の教わって来たことを少しづつでも還元していきたいと考えている。そしてOB会員の一人でも多くの人が救急に対して興味を傾け、安全登山に役立ててもらえたらと思っている。

お月見山行

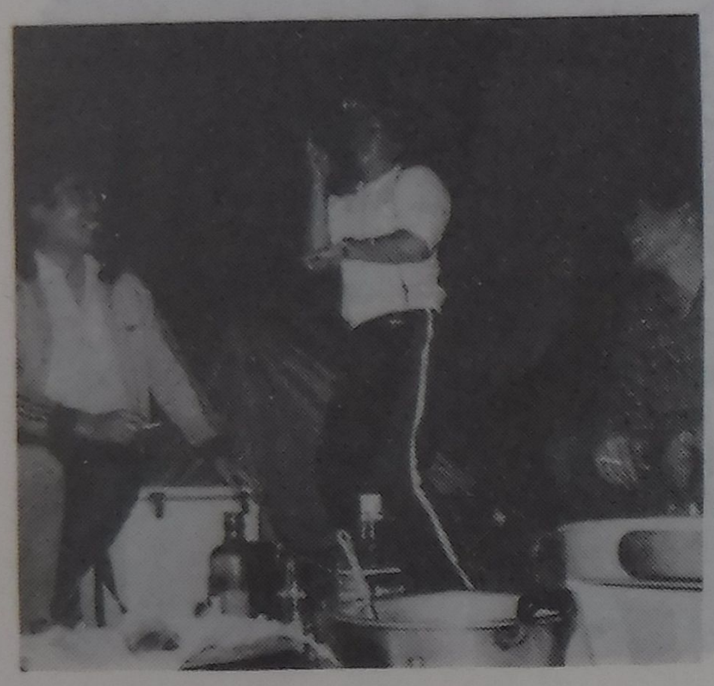
昭和55年10月18日～19日

秋山　徹

OB会では、皆で集まって酒を飲んで騒いだりする時には必ず、「S山行」という名目があるが、一つの例外というべき悦楽山行がこのお月見山行で、今回も有志を誘って、相模川の対岸にある小倉山の一等地で前回同様行なわれ、しかし去年のような集中豪雨ということもなく、もう最初から気分良く、お月見を楽しんだ訳であるが、例年同様、月をみると人格がまたたく間に変わり、狼とはいかず、酔った顔を月とはあらぬ方角に向け、遠く故郷の星座をしみじみとながめ、シュワッチという声も勇ましく、月光仮面ならぬ、ウルトラマンと変身し、周囲の仲間



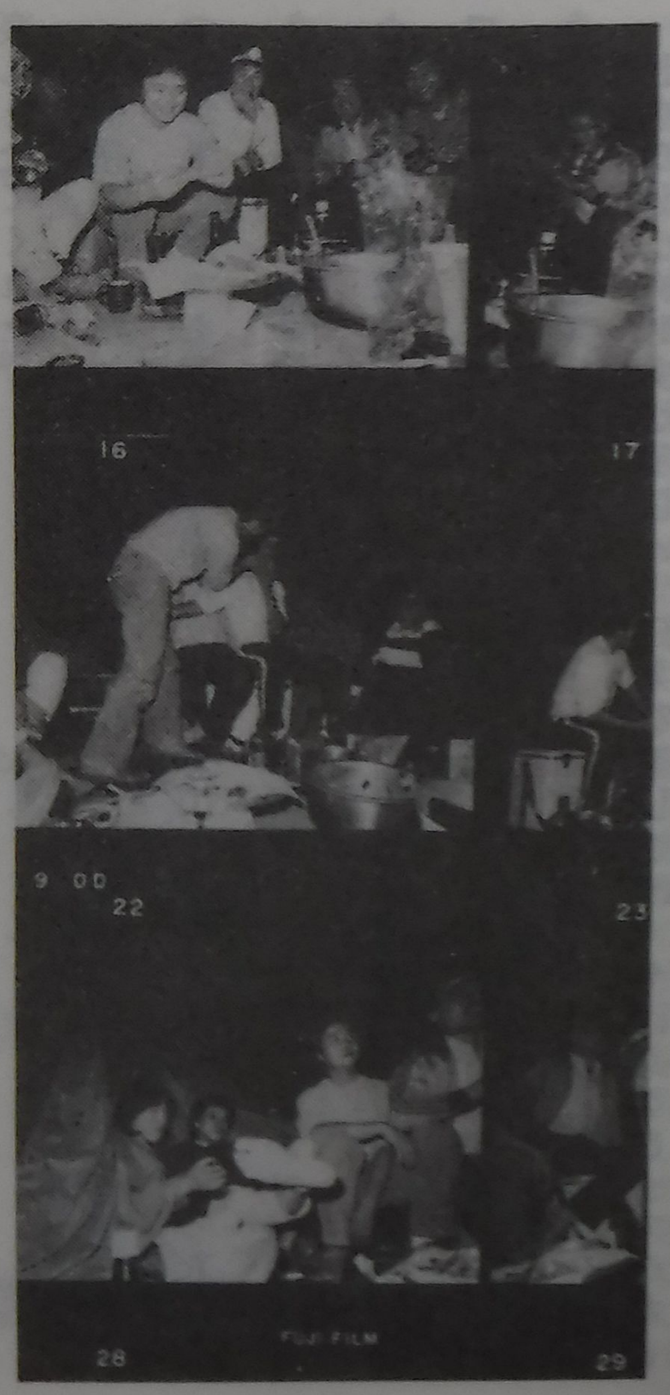
にスペシウム光線を照射しつつウイスキーをガブガブやり、それにつれて皆、そばにあるアルコール類を、グイグイ、笑いこけた腹につめ込み、面白がって、ヤンヤヤンヤの声が遠く相模原までとどきそうで、それでも数年前の様にみんな手をつないでフォークソングなんて習慣もなくて買ってきたフライドチキン、ポテトチプス、イカのクンセイ等々も無くなったのにもかかわらず、それでもまだまだ健康的に飲んで、サワイで今日は帰らなくてもいいんだなんて一人一人思ったりしている訳で、そんな所で急にマジな話をしたりしてつまらない話もしたりして、今夜しかないような気になって各自、睡を飛ばし飛ばし話をして、それでも、ちゃんと夜はふけていって、近くの茂みからウェーていう声もして来て誰かのそろそろ寝ようぜという声を合図に、もうビンビンに張ってあるテントにもぐり込んでいると雨が降って来て、身体を横たえるともう次の日で、目を醒ますより、あたり一面からただよってくる宴の臭気で鼻が醒めたりして、たまらなくなって早々と帰り支度をして、車を連らねて、朝のドライブをする頃には、少し身体も調子良くなってしまうようなお月見山行。



スキーPARTI

諏訪部　信一

下の玄関の所の電話のベルが鳴っています。私は、暖かいベットの中で夢うつつにその音を聞いていました。雨戸をガタガタする音や人の声も聞えます。「そうだ。」ベットから飛び出ると電灯のスイッチを引いて、時計を半分寝ぼけた目をこすりながら見ると、針は五時四十五分を指しているではないか。今日は、ＯＢ会のスキー。五時に私の家へ集合して、白樺湖へスキーに行く事になっているのです。パジャマのまま、下へ降りて行くと、「起きたよー。」と言う声。玄関の戸を開けると、そこには全員の顔がそろっていた。昭和五十六年一月二十五日、ＯＢ会



のスキーは出発する事となった。メンバーは萩原、倉地、新津、秋山、私の五人のOB会メンバーと、私の会社の友人が二名とその友人一名の合計八名である。私は前の晩にスキーを車のキャリヤーにつけて、荷物をトランクに入れて、準備は万全であったのだが、不覚にも寝過ごしてしまったのであった。みんなは、時間通りに集合して、私を起すのに苦労したとの事。集合場所が、私の家だったからよかったものの、他の場所だったら、置てきぼりをくうところだった。全員が三台の車に分乗していざ出発、最初の私のミスを挽回するように順調なスピードで相模湖インターから中央道へ、そして勝沼インターへ、国道20号線を早府、韮崎とすぎて、夜明けの道を白樺湖へ進んで行った。蓼野の手前、富士見峠へさしかかると、車の渋滞であった。今まで順調に走っていたのに、まったく進まなくなってしまった。同乗の萩原が好奇心旺盛なところで見に行くと、車五台の事故との事、そんな、こんなで、白樺湖へ着いたのは十一時少し前。スキーはベテランぞろいなので、準備をしてひとすべり、私は三年ぶりのスキーなのである。最初のうちは、自分でもこわごわと言った感じであったが、何とか滑れるものである。集合時間を決めて、各自適当な滑り方で、ゲレンデを滑っていました。お昼は、ビールで乾杯。午後は四時半まで滑って、お土産を置って、一路家路へ。蓼野で食事をして、相模原着が夜の十時頃と言う、非常に忙しいスケジュールながらも楽しいスキーでした。費用は交通費からリフト代まで総てを含めて、一人五千円程度でしたので、もっと多勢の人達が参加出来ればより楽しいスキーになったと思います。皆さん、次回は必ず参加しましょう。私も次回は寝坊しませんので、つれていって下さい。

米子沢へのお誘い

萩原　進

越後の山は雪が深い。その雪が春になると溶けて沢へ流れ込む。そして土砂をすべて下流へ押し流し、あとにはすばらしい岩床が現れる。ナメやスラブがそれである。巻機山、米子沢もそんなすばらしい沢登りを楽しませてくれた。

割引岳から井戸尾根を巻機小屋へ下ってくるあたりから左にツメを持つのが米子沢である。このあたりは巻機山でも最も美しいところだと思う。メルヘンの世界ということばがぴったりする。汗をかいて登ってきたら、こんなだらかな草原へ出る――そんな思いを抱いていた米子沢であった。井戸屋根中腹の展望台から望まれる沢筋もやりがいがありそうだった。そして、そんな期待にりっぱに答えてくれた。

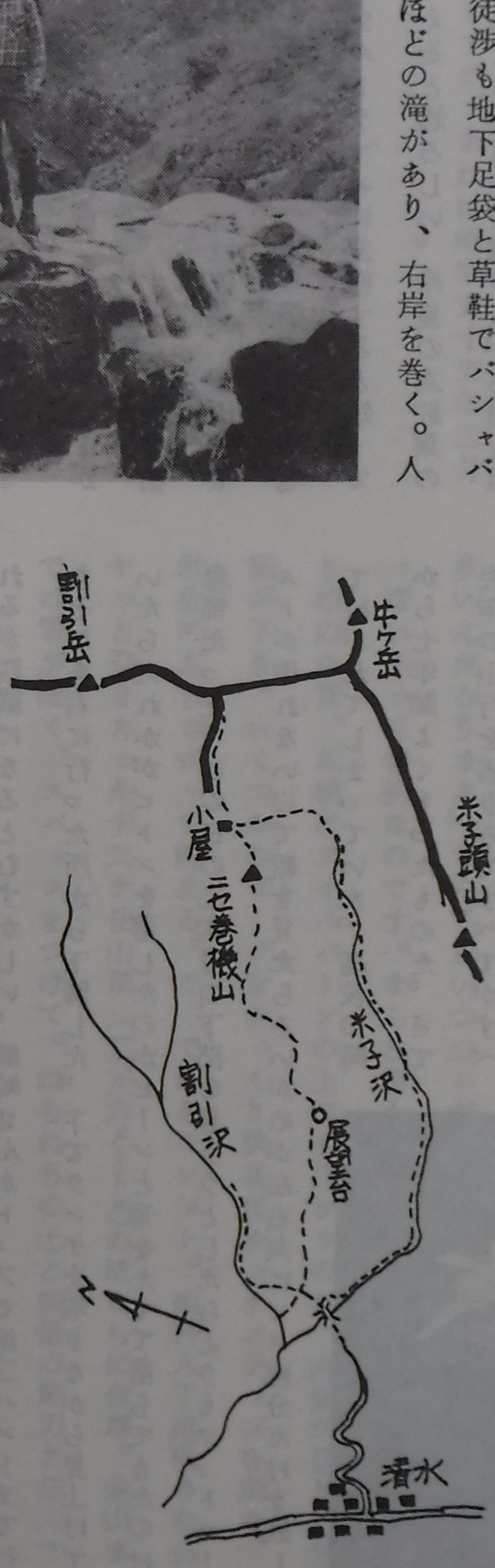
上越の山は秋がすばらしい。紅葉の美しさは、やはりここまでこなく

ては、と思う。清水からの屋根道が割引沢への道と分れる少し手前でコンクリートの橋を渡る。ここが米子沢の取り付きである。

朝食休憩のあとしばらく大石のゴロゴロする河原を往く。しばらく登るとガレた河原は終り、小さな滝を迎え、気持ちの良い遡行が続く。少し早かったかな、と思った紅葉も登るにつれて見ごろになってきた。青い空に美しく燃えている。めんどうな徒渉も地下足袋と草鞋でバシャバシャやって渡る。中程に二十メートルほどの滝があり、右岸を巻く。人もある程度入っており、踏み分け道がある。この少し上流から二百メートルもあろうかと思われるナメが始まる。広々とした気持ちの良い岩肌をスタスタと草鞋を効かして登る。少くなった流れが緩斜面の岩を滑めて流れ落ちてゆく。



狭くなったツメは



'80年度の山行

小沢　聡

去年一年間に行った山々を思い出すと、まず五月の巻機山、これは睡眠不足で一日目はバテてしまったが天気もよく頂上からのスキーによる

滑降は豪快だった。あまり天気がよいので顔の皮がよくむけた。八月は一人西穂から奥穂を目指すも二日目は雨、飛騨側からの強風にあおられつつも独標まではと頑張り独標からすぐに引き返す。上高地に下って来てしまった。下着まで雨がしみ通って着換えたいのだが更衣室は女性用しかない。しょうがないのでトイレを使った。ザンザ洞へ行った時はザイル、三つ道具などは万全であったがピブラム底の滑ること滑ること、遂にナメ滑でスリップダウンしてしまった。幸運にもかすり傷のみであったが続いて槫田と川嶌は滝壺へドボン。笑って終って本当によかった。九月には苗場山へ行ったのだが、計画の不備の為佐藤、小宮とテントからついでサポートして結局野天風呂で星を眺めてチョン。十月は再度の槍・西穂チャレンジ、今回は逆コースである。バーティは佐藤、槫田君であった。夜出発島々でカンビール三本を購入し沢渡の上の湯度の駐車場にテントを張って飲んだのだが槫田がウルトラマンに変態すると知っていたら絶対に飲ませなかった。後で考えると恐ろしい。冷夏の為紅葉の盛りにもかかわらずバッとしない。それでも写真など撮りながら槍を目指す。殺生でのモルゲンロートまではよかったのだが変なロール雲が出現し天気は悪くなってゆき南岳では雨が本格的になったがランチを済ませてキレットを強行した。ナイフリッジ状の部分から飛騨泣きやらあったのだが気がせいているのとガスがかかるのとでスリルも半減してしまう。本来ならもっと楽しめるだろうし、佐藤ならここで逆立ちでも始めたに違いない。さすがの若い三人も北穂に着いた時にはもうウンザリしてしまったので涸沢へ下った。途中槫田が岩なだれを起してヒヤッとした。何しろその下は天場なのだ。思わず血の気が引くほど派出な崩れ方だった。翌日は天気も回復し昼には晴れて又もや写真を撮りながら下ったが、残念なことには今回の山行の槍から涸沢までの写真は一枚もない。十一月は三ッ峠へロッククライムに行く。今年始めての雲海を見たので少々感激。三ッ峠の岩場はかなり高度感がある。三級ならトップでも登れるが四級になるとむずかしい。嶋崎さんがトップで第二バンドまで行きそこを右に行った所から下降した。下でランチを取りながら見上げていたらだれかがピトンを落したのかピーンと音をたてて落ちてきたのは恐怖だった。この日の二本目の下部を登ろうとしたらどうもフットホールドが取れないので靴を見たらあいがめが左右共にビス部分だけを残してはがれてしまっていた。高校の時から七年間よくもったものだ。さて去年の山行を省りみてすべてがすべて崇られているのはいったいなぜであろうか。今年こそは満足のできる山行をしたい、又宿題の西穂～奥穂鋸岳縦走を成功させたいと思う。



御坂十二ケ岳・ひとり言

榎田一典

昨年のことを言うと鬼が泣くと言いますが、あれは昭和五十五年三月十六日のことでした。

二月はスキーばかりでそろそろ山へも行きたくなってきた。バイトの毎日、ゴミ捨てなんかで工場の外へ出るととても心地良い風、青空、もう春なんだなあと顔に似合わずうれしくなってくる。そうだ、あさっての日曜は山に行こう。とまあ、ほんのおひるね山行と思っていたのが大きな間違い。車窓から見る限り御坂の山の雪はまるでなく、アイゼンは勿論、危くスパッツまで置いていこうとする私でした。

登り出したとたん腹痛に襲われ稜線でキジを打ったまではよかったのだが、そう、忘れたのである。〇紙がないのである。さあどうする。葉っぱといっても枯葉ばかり、これではパリパリと手の中ですぐに壊れ役に立たない。あわやもう二度と立ち上がれないのかと思った私の耳にあの唄が聞こえてきたのです。相山協スキーのバスの中で誰かが歌ったあの唄が：。♫民衆の紙黒チリは、安くて枚数が多い～白チリは高すぎる、新聞紙品がない♫そうだ!!新聞紙だ。こうしてピンチを脱出した私は、低いプッシュに悩まされつつ登り続け、草原状の突然三匹の獣が行く手に立っているではないか。「狼だ」体から血の気がサッと引く。逃げるんだ、と思い体をピクッと動かすと獣の方が逃げてしまいました。よく見ると獣は犬でした。毛無山頂には初めての、そして立派な指導標があり、「十二ケ岳て言うくらいだからさぞかし峰が多いんだろうなあ」なんて思いつつ：が。ガビーン。確かにピークがいっぱいあって岩肌なのです。なんと雪も出てきたよ。南側の斜面はくさり始めた雪、北側はアイスバーンの上にサラサラの雪。南側が登り、北側が下り。いくつかのピークをゆっくり慎重にキックステップを刻み、針金にぶらさがって越える。で、でたあキレット。両神八丁尾根みたい。やっと登りきった十二ケ岳山頂（一六八六メートル）のほこらに合掌。金山まで七三〇の展望は春がすみの南アルプス。大石峠までの道は植林の間を縫っているのだが、その木の枝がちょうど人の肩のあたり、つまりかがんだ姿勢で歩くと雪が背中に入って、びしょぬれ。ここでは雪が深く、スパッツをつけて。ねちねちの土と熊笹の節刀ケ岳（一うするしかない。ついにトレースもとぎれ、熊笹の中腰まで雪に埋もれての大格闘、わーんもういやだー。雪の消えた大石峠はとても気持ちのよい所でして、勝山村の兄ちゃんが運動靴で遊びに来てました。僕は持参の双眼鏡で甲斐駒、八ケ岳、金峰なんぞを眺めてから下りました。大石部落も河口湖畔唯一の名所、という感じで、ぶらぶら田んぼや畑の畦

を歩いて、土着の人々に「なんだあのバカ」という目で見られました。心地良い風が吹いて、やっと春の匂いをかいだ気がしたのです。こうせつの家はきっとあの辺だゾ。

郷土研究について

小宮　豊

今年は山行記ではなく、私が大学で四年間通し、活動してきた郷土研究についてふれたいと思います。

郷土研究というとふつう、高校などでは自分の郷土を調査研究する郷土研究会と同一視されがちであるが、私が大学で入ったサークルでは柳田国男の郷土研究。つまり、民俗学という言葉が使われる以前のこの類の学問の総称としての郷土研究といったことです。（まあ基本的には同じであるのだが）。簡単に言いますと、ある調査地（民俗的価値のある所）へ行き、地元の人々から年中行事、歴史、信仰、口頭伝承などをフィールドワーク中心に調べることなのです。この場合、資本は足なのでワンダーフォーゲルと似ているのです。そして、この調査を夏と春の年二回で十日間程の日程でおこない、駿台祭で展示発表し、一冊の本にまとめるのです。

以下、色々とむずかしいご託をならべてきましたが、要するに、六大学の応援、ソフトボール大会、コンパなどを通してサークル内の親睦を深め、それを基礎としてムラの人々との親睦を深めることをスローガンとしているサークルなのです。

私が一年生時は福井県丹生郡織田町山中という戸数百数戸のムラへ行き、城跡探し、廃道歩きなどをして、ワンゲルの力を発揮したのです。

二年では長野県下伊那郡阿智村上郷という中央道の恵郡山トンネルの入口近くの戸数六、七十のムラへ行き、交通交易を中心に調べたのです。

三年では私の推薦する秋田県由利郡東由利町法内という場所にきまりここは、秋田県南部で横手と本荘の中間で出羽山中にある秋田でも有数の豪雪地帯であり、暖冬の年でも二メートルも雪がつもっていて、雪の中の生活を初めて体験したのです。それと、さすがにここまでくると言葉を聞きとるのが困難であった。（特にわれわれのサークルでは老寄りから話しを聞くので。）

四年では現役を半分しりぞきながらも、群馬県勢多郡黒保根村涌丸を調査した。ここは赤城山の南のふもとで、あの足尾線から少々奥へ入った所です。

四ケ所もの生活にふれることができ、ただの旅行では味うことのできない感動をうることもできた。四年間、サークルオンリーで過ごしてき

たことに後悔していません。ただしその間、山行の方がおろそかになってしまったことが残念です。

最後に、何だか山ぐつに出す原稿でもないように思えますが、でも根本的には山行につながっている様に思え、私の気持ちをかきました。これから出来るかぎり山行に参加したいと思います。

黒部川・上の廊下・感想編

佐藤通

黒部の流れは冷たい。そして雨。二六日の夕方に降り出した雨はいよいよ強くなってきた。広くない河原にテントを張ることになった。水面より一米の所だ。その時は、そこで安全だと思った。しかし一米程度で安全のはずがなかったのだ。二七日の朝二時ごろ、足が冷たいので目がさめる。すると足元に水があったのだ。川の音は狂気に満た轟音となっていた。濁流は二人のテントを今、まさにのみ込もうとしていたのである。夜の暗の中に、ヘッドランプでてらされた川の流れは、巨石をともない、木々をおし流す。石は岩床に当り、脳髄を刺激する響きとなる。ここまで水が増るとは、この様な時はすごく焦る。荷物の端は水につかっている。雨はあいかわらず降っている。

立石より奇岩までは岩がきれいである。めて高い所へ、でも高いといっても三米程度、広さ2～3畳の岩の上。下は地獄の流れ、ころげ落たら黒部湖の底へ直行。目の前を三途の川が流れているようなものである。二人はそこでツェルトをかぶり、雨の中を朝まですごしたのだ。雨は朝になるとあがったが、川は増水している。これでは渡ることはできない。時間をつぶしながら水の減るのを待つ。雨の降っていない天気なのだが、それほど良くもなく、それでも時々さし込む光に体を温め、ぬれた荷物を乾かす。雲のきれ間の空が、やけに青く見えている。雲の流れは速く、天気がめまぐるしく変化しているのだろう。水は午前中にだいたいひいた。増えるのも早いが減るのも早い。ぼちぼち出発だ。

立石より奇岩までは岩がきれいである。うたのしめるだろう。ややむずかしい場所もあるが、ルートのとり方しこだけを歩いても、けっこだいだろう。立石奇岩は右岸寄りに立っている。黒部の巨人だろうか。上流を見ながら何を思っているのか。奇岩の対岸にはスダレ状の滝がかかっている、これもなかなかおもしろい。

川はだいぶ歩きやすくなってきた。大東新道では、ひさしぶりの人。薬師小屋より上流は、まさに黒部源流の感じが強い。このへんまでくると実にのどかな感じになる。一日つり糸をたれるのもよい。日なたぼっこをするのもよい。女の子といっしょなんて最高だ（美人に限る）。早

大のワンゲルにいい子がいた。淵にはイワナがうようよといる。
次回ここにくる時はつりざおを持ってこなくてはならないようだ。

源頭に近づいたということは、水量や、まわりの樹林の様子、河床勾配などからわかる。所々に野っぱらも出てきた。人の話声が聞える。雲の平への登り道である。ここで黒部川と分れることにする。やっと上の廊下の遡行が終った。のこりのわずかな所は別の機会にふらりと、おとずれてみようと思う。

話は余談になるが、双六より上高地まで、休み時間をのぞいて八時間休みは槍の肩と横尾のみ、雨の中みじめであった。

今回の山行（川行かな？）は雨にたたられて辛いものだったが、それでも充実したおもしろいものだった。危い目にも何度かあった。水が冷たく、どうしてもがまんができず川を渡れないこともあった。恐怖の一夜や、流れにまけ、深みにはまりそうになったこと。終ればみんな思い出だ。登山道に出た時、二人でニヤリと笑って終了。

小沢さんの足のいいやつ1600GTで、何と津久井から小淵沢まで二時間。

雨のキレット＋

榎田一典

初めての上高地は予想通り、自然の美しさの他に、落ち着きってものが感じられない所だった。上高地＝観光地＝缶コーヒー＝缶コーラ。牧歌的な徳沢園。くたびれて横尾。居眠りして槍沢ロッジ。雨が降り出して殺生。振り向けば砂糖に群がるアリ。

翌日曇り。奇怪な雲。強い気流が穂高にぶつかって、その形になった雲が流れてゆく、不思議な光景。南岳避難小屋手前でついに本降りとなる。下ってしまおうか、の声もあったが、一度キレットを通ったことのある佐藤さんの「根性があればできる。」の声。逆にとれば、下ってしまえば根性なし。Go！……おそろし。

まずは急降下。岩が濡れてすべるし、ハシゴは冷たい。切戸までに二、三カ所恐いところがあったが、なに分霧・ガス・雨で高度感がないのが幸か不幸か。横尾谷を下る年寄りパーティーがあったけど気をつけてね。けっこう雨でもガッツな人がいますなあ。最低鞍部につく。飛騨側からの風にあおられて登り出す。やはり大キレットは槍側から行く方がよさそう。そして飛騨泣き。地面に立っていることを肌にしみて感じる。ちょっと気を抜けば、ほら両手をパッと離しただけで地の底へ落ちてゆけるよ。

雨に打たれての行程はつらい。しかしそんな自分をさしおいて、もっとガンバリ屋さんに逢ったりするとハッと甘ったれている自分に気付くものだ。みづがき山の単独行の少年、西鎌を独りで大きな荷物をしょっ

て登ってきたお姉さん。そして今、雨の大キレットを一人で黙々と、つらそうな顔一つ見せず（笑顔までみせた）おばさん。ホントにありがとう。そしてがんばって。

頭上に北穂小屋の屋根が見えて、意外に早く大キレット越えは終わった。二時間三十分。北鎌は七時間かかったんだからそれからみれば易いものだ。さてこれからどうしよう。

雨は強くなる一方。佐藤さんは奥穂へ行きたいなんて言ってたけど…なんとか常識的方向へもってゆきたい僕は一曲歌いました。♪おりて行きたい涸沢、おふろに入れる徳沢、ここでさよならするわ、雨の北穂高。

雨でゆるんだ地に足をおいて落石を誘発せしめた悪い子ちゃんの僕。反省してます。幸い下に道や人はいなかったけど、とても恐ろしかった。

翌日は皮肉なことに屏風岩下でカラッと晴れ、大岩壁に頭を下げさせられました。そして下山者の行列。今回一番感動した景色は対岸の小梨平あたりの樹林、緑黄緑よりどりみどり茶色黄土色…。木の葉を光がやさしく包みこみ、風がやさしくなでてできあがった自然の水彩画。

帰りは160㎞/hのスピードで滑走路をふっとんできたよ。

追伸　一月の苗場スキー合宿は、大雪のため、軟弱にも車山になりました。参加者、秋山さん、江成さん、榎田でした。なお駐車料金は払っていません。

雑感・北沢峠

増田義昭

一九八〇年九月、北沢峠を定期バスが通うようになり、峠の様子は林道建設、そしてバス運行と数年間で大きな変貌を見せた。

一九七四年八月、高校現役時代の初めての夏合宿でこの峠を訪れた。重荷を背負って焼けつく戸台川を遡り、急な八丁坂に苦るしんでやっと北沢峠に辿り着いた。深い樹林に抱かれた、物静かな池のある深山の峠にふさわしいところであった。初めてのアルプス山行であり、今も深く印象に残っている山行である。

当時既に南アルプススーパー林道の問題は起っており、八丁坂上部、大平小屋前で林道工事は止っていた。八丁坂を登り切って大平小屋前に止っている自動車、白々と続く砂利の車道を見た時、自分が南アルプスの深山にいることを疑ってしまう程驚ろいた。大平小屋も林道工事の飯場のようだったことが印象的であった。この合宿のペースキャンプは北沢長衛小屋上部の河原であった（今、ここは幕営禁止になっている）。

この合宿以来毎年のように北沢峠に登った。定宿としている（といっても天幕泊りだが）北沢長衛荘付近の河原では、レリーフの前の大きな

路が年々少なくなっていったり、河原にスチール製の便所が設置されたり、幕営地の制限が行われたり、行く度に変っていった。

一九七八年、南アルプススバー林道が北沢峠を越えることが決まるとすぐに測量等の作業が開始された。いよいよ来るべき時が来たな、そんな気持ちで晩秋の北沢峠を訪れることにした。今行っておかなければあの原生林の中の静かな北沢峠に立つことはあるまい、そして高校生の時、重たいキスリングに苦しみながら初めてここに来て味わったあの感激を二度とそのままの北沢峠で思い出すことはあるまいと思ったからだ。

十月二十八日、豪雨の中を戸台川に沿って登った。八丁坂を登るころには雪になった。大平小屋前では降雪もさらにひどくなっていた。雪の北沢峠には測量用ポールや、測点を示す赤い杭が打ち込まれ工事の近いことを知らせていた。この日は大平小屋に泊ることにした。

翌日、下山前に、こんな静かな原生林におおわれた北沢峠を見るのはこれが最後だろうと思い残り少ないフィルムにこの風景をおさめ、大分長い時間をこの峠で過した。

翌年（一九七九年）五月、未工事区間であった約一五〇〇メートルがついに結ばれ、峠を自動車が越えたという。

この年の八月、OB会の南アルプス白峰三山縦走合宿終了後、その足で北沢峠を訪れた。奈良田に下山後パーティーから別れ、バスで広河原へ行った。広河原から一人、林道を北沢峠目指して歩いた。

かっての林道の終点、林道が山腹の急斜面で突然ポッンと途切れていたところは無残にもL字状に山肌を削ずられて、林道が峠の方に向かって続いていた。登山道を知らせる道標と赤布が北沢の河原めがけて登山者を導いていた。林道を分かれ登山道に入ると以前通りの北沢が流れている。しかし、そのすぐ上にはあの白々とした車道が通っているのだ。

幕営地に荷物を置くと、既に薄暗くなっていたが、すぐに北沢峠に登ってみた。幕営地から五分と行かぬうちに工事のダンプカーが止っているのが目に入った。あまりの変りようにただ呆然とするばかりであった。夕暮れの薄暗さの中にも白々とした林道が浮んでいる。この峠には不似合なダンプカーがある。原生林の中までブルドーザーで踏み込まれている。北沢峠長衛小屋は林道の脇に「峠の茶屋」といった感じで建っている。

ああ、もう二度とあの静寂な原生林が、幽玄な趣きをたたえた池がここに蘇り、急登に疲れた僕たちの心を和ませてくれることはないんだ。そう思うと腹立たしさと哀しさが無性に込み上げて来てその場に立ち尽くすばかりであった。

そして今年（一九八〇年）の十月、また北沢峠に立った。今年は九月より広河原から定期バスが運行されていて峠まで歩かずに行くことができるが、あえて歩いてみた。林道は随所に白いガードレールが設けられ、バスの運行の安全を確保している。北沢橋から北沢に沿った林道は、所

所拡幅されているようだ。また砕石が敷かれて以前よりさらに立派な車道となっていた。

広河原からザックを背に林道を歩いていると芦安村営の定期マイクロバスが三台連って茶色い埃を舞い上がらせながら僕を追い越して登って行った。峠までの三時間余りの行程何回かバスに追い越されたが、その度に埃から逃れるように顔を背けなければならなかった。かって足首を捻挫してこの林道を杖ん棒を頼りに後ろ向きになって歩いた時よりも辛く苦しい思いが胸の中を込み上げてきた。

北沢峠に近づくと山腹を削ってつけられていた林道は凹部を真直くに峠を目指して登っていく。その林道の峠の方から小学生にもならない子供が二人、親に手を引かれてはしゃぎながら下りてきた。峠にはバス停と鉄製のゲートが作られており、老若男女の観光客がたむろしていた。そして以前は素朴な山宿という感じだった北沢峠長衛荘も三角屋根のモダンな建物に建て替えられようとして工事が行われていた。

登山者だけの北沢峠から広く開かれた北沢峠になっていくことを否定ばかりはしないが、そこの貴重な自然まで打ち壊してどこにでもある観光地と同じにしてしまおうとすることは、登山者として、北沢峠の自然を愛する者として哀しい限りである。

山奥く深くまで林道を通し、何の山の知識も装備も持たぬ観光客が入って来てしまって良かったのだろうか。ゴミをはじめとする自然保護上の問題も当然であるが、こうした観光客がちょっとその辺まで、と峠を離れ散策に入ったとしたら、二千メートルを越える高山では厳しい自然にとまどい何を起すか考えてみただけでも恐ろしい。

ここ数年の間に大きく変貌した北沢峠だがこの峠にはやはり初めて来た時の強い印象が僕の心の中に深く焼き付いている。二度とあのころと同じ姿の峠を見ることはできなくなってしまったが、あのころの思い出を訪ねてこの峠に立つことはできる。

僕の大好きなこの峠、伊那と甲州の歴史を継いだこの峠を良い意味で世の人々に知ってもらい、自然保護のひとつの碑となってくれたらと念願している。

突然目の前に……！

事件その①――――

新津正己

昭和56年3月11日水曜日の午後9時30分。ところは港区六本木のC化粧品のデザイン室での事でした。5時半に平常業務の終るこの会社の一室に、明日を背負って立つ勤労青年、ニーツ本来の姿があった。

4時間の残業に疲れも見せず、机の上を片付け出した時である。廊下を歩く足音が部室の前でピタリと止った。ドアのノブがガチャガチャと音を立てて回った。背筋に寒けが走り、身を固くし、手は机上の武器に成りうるものを探した。嘘！ウソ！本当はボケッと見てたのヨ。

ドアが開くとそこに、ナ、ナント広志の顔があったのだ。突然の出現に声も出ず立ち尽くす俺の目に、もうひとつの顔が飛び込んできた。児玉だ。ええっ何故？話はともかく、会社役員だけが毎朝飲んでいるトマトジュースをふるまった。二人は渋谷で酒を飲み、金を使い果し、尋ねて来たという。六本木にあるというだけで感で会社のビルを探し当て、一階から順に六階のデザイン室まで来たという。その山男の感の良さと努力に対して、そして給料日の翌日であったこともあって〝CHACO〟にてワインで乾杯し、肉をごちそうした。

＊深夜の駅のホームで残業疲れでくったりしていると麻雀帰りの小宮君と出会ったりして、山と御無沙汰してても、ちゃんと山のニオイを届けてくれる山の友・友・友に感謝。

事件その②

昭和56年4月4日土曜日のことだった。ところは人と湯気でごった返えす苗場、みつまたかくらスキー場の一番上のロッヂでした。小金井のテニス仲間とスキーに来て、丁度昼飯を喰おうとしているところだったのです。食券を買いに行った奴が遅いので売場に目をやったら、そこにあー秋山とえー榎田が居たのです。もお、びっくりでした。〝やまぐつ〟の原稿を放り出して遊んでいたら、編集長がそこに居たのだから。春スキーでメチャクチャな人出なのにネ。よく出会ったものだ。二人はテント泊りという山男硬派ツアーなのに、俺はホテル泊り、夜はディスコの軟派ツアーでした。

飲み会二題

諏訪部　信一

OB会のメンバーと酒を飲むと言う事は、それほど多くない。一時は町田によく出かけたようであるが、最近はそんな話しもあまり聞かない。私が酒をあまり飲まない事もあるが、酒を飲みに出るのはきらいではない。今年は、お月見山行と忘年会が楽しい席であった。

10月18日、仕事が終ってから小倉山へと出かけて行った。昨年は雨にたたられたが、今年はまあまあの天候である。去年と道路をはさんだ高台へテントを張る。準備は順調に、そして、食事も終わり、アルコールもまわり、ところがです。ここで、秋山君のバッパ注射がはじまったのです。すべての発端はそこにあったのです。いろいろ歌を歌いながら、バッパ注射を見ながら、江成君の〇〇〇〇音頭も終わり、後継者として榎田君が決定し、その被露がありまして、皆さんなごやかにやっていたのでありますが、突然、ウルトラマンがやって来たのであります。酔った榎田君のウルトラマンはスペシャル光線を出し、大用君や倉地君をやっつけて、完全に意識の外へ飛び出し、騒ぎまわったのであります。近年、あれほど腹をかかえて笑ったのは、例を見ないほど、一同笑いころげた、楽しいお月見山行でありました。明朝は、ゲンナリしたウルトラマンは、午後三時頃までダウン。

12月6日、西野々の会場は熱気につつまれていた。私が到着したのが少し遅かった事もあり、全員出来上っている様子。桑田さんの色っぽい事といったら。〇B会の忘年会は、少しでも遅く行くと、食べるものはもまわり、ところがです。ここで、秋山君のバッパ注射がはじまったのたくありません。したがって、必ず、食事を各自、用意して行く事です。しかし、内容はどこも同じ。もっとも、今年はキャットフードが出ていませんでした。酔ってダウンの沢井君は翌日は三ケ木の病院で、大きな身体を小さくしていました。コンディションには注意しましょうね。山へ行くチャンスの少なくなった人達、とにかく多くの飲み会をやりましょう。



カレーライスの歌

珍しく
何か食べたいと思って
浮かんだのが
カレーライス
　あそこの四つ角通るたびに
　いい臭いがしてたっけ
行ってみよう
　カレーライス
カツカレー・エビカレー
一番安いポークにしよう
「ポークカレーを二つネ」
カレーの香りで　いっぱいだ
　白いご飯のお山の横に
　カレー色の海が広がる
　ポークの島がうかんでいる
　いくつあるかー一つ二つ……
　波を起こして
　白いお山を染めて
　　ろ
　　VC
!!

　僕の口の中
　トロッとして甘くてピリッと辛くて
　まるで君みたいだ
アツアツのカレーライス
君のホッペが赤く染まる
食べている時って幸せだなあ
ましてや
僕の隣りに君がいて……
僕の心も赤く染まる
カレーライスで　ごちそうさま

　その後がついていないんだ
翌日の　Lunch
友だちの家で　カレーライス
その日の夕食
おふくろさん曰く
「久々に今日はカレーよ!!」
ウッ!!絶句
男は我慢だ　カレーライス

僕

山が抜ける

ああ、山が抜ける。
大地に刻まれた人間の爪跡をかき消すように。
林道は崩壊した土砂で埋まり
車が、枯れた倒木の下で潰れている。
奥鬼怒の新道開発現場だろうか、
もう始まっていたのか！
ブルドーザーが沢の底に、
腹を見せて呻いている。
神々の怒りが始まったのだ
ああ——
ついに、神に破弾界を越えさせてしまった。
山々が、峰が抜け落ち、
赤茶けた丘に形を変える。
そのころから、
奇妙な斑点病が流行しはじめ、
多くの人々が倒れていった。
妙薬は、山の硬質清水しかないという。
人々は彷徨し、奪いあった。

ああ、自然の神よ！
私たちは忘れ過ぎていたのです。
あなたから生れたことを、
あなたに抱かれて育ってきたことを。
ふと自分の腕を見ると、
黒い斑点が広がっているではないか。

汗びっしょりかいて、朝の夢が中断された。
窓を明けると
すでに春の光が高く、
眩しかった。



晋

編集後記

山麓の里にリンゴの花が咲き出すと
山では残雪に太陽が輝き
川面に浮ぶ魚の影も素早くなって
春のいぶきを感ずるようになる
五月には唐松や白樺の新芽が顔を出し
バス道路の桜並木が色づけば
最早やロッジの周囲は雪が消えはじめ
雪どけの水辺にフキノトウ、水芭蕉が
春の調を奏でる
尾根筋の残雪には石楠花が映え
テラスに聞えるカッコーは
私達を桃源境にさそう
石の湯ロッジのC・Mより　辻一

＊春になるとふとしたことで、うれしくなる。今年は雪が多いから残雪の丹沢がくっくりとみえると、それだけで一日が豊かなものになっていく。

＊遠いいつか、山の好きな仲間の集まる山小屋を作りたいと想う。夢だけれどできたらいいなあと一人でにこにこしてしまう。

千秋

何書こうか。改まって編集後記なんて言われ…。原稿が集まらないことをグチッぽく…？いやいや、そんなこと言ってもはじまらネエー。OB会の役員になっていたのですが何もできなくて…。何かウシロめたいのを少しでも解消するため、鬼の編集長に変身したワケです。二十才を向え、妙に忘れっぽくなってきた。「アレ？何しに来たんだっけ」とか。老化現象かな。言うは易し、学は成り難し。骨折り損の銭失い。

山に行けば、山に行けばきっといい事があるさ。逃げましょうね。隠れましょうね。うっぷん晴らそうよ。何げなく登ろうよ。一所懸命登ろう。あれ、新津さんがよだれたらしたよ。

一典

——会　員　住　所　録——

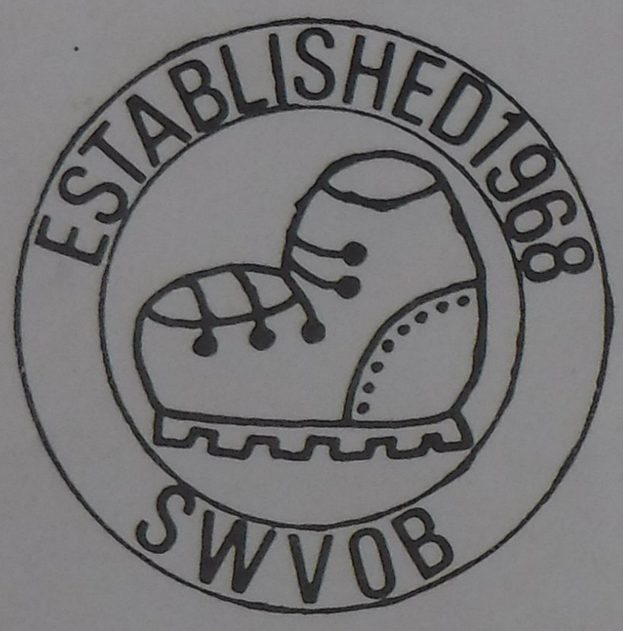
会員番号	氏　　名	住　　所	電　　話
6801	諏訪部　信　一		
6902	倉　地　哲　郎		
6903	萩　原　　進		
7001	大　房　利　男		
7002	千　葉　典　義		
7101	嶋　崎　三　郎		
7102	諏訪部　千　秋		
7201	新　津　正　己		
7301	泉　　篤　志		
7302	近　野　貞　子		
7303	井　上　京　子		
7304	山　口　　徹		
7305	井　上　富美子		
7403	江　成　利　一		
7406	秋　山　　徹		
7407	泉　　桂伊子		
7601	小　澤　　聡		
7602	森　田　純　子		
7604	悪　原　義　範		
7701	河　本　宏　美		
7702	小　宮　　豊		
7703	増　田　義　昭		
7704	平　田　　恵		
7801	児　玉　陽　一		
7802	佐　藤　　通		

会員番号	氏　　名	住　　所	電　　話
7803	田 中 広 志		
7901	榎 田 一 典		
7902	川 嶌 菊 夫		
7903	島 野 茂 樹		
7904	小 林 輝 明		
7905	沢 井 浩 樹		
8001	桑 田 菊 美		
8002	松 田 英一郎		
8003	中 川 雅 代		

会　　友			
6705	松 沢 一 憲		
6809	中 里　　進		
6904	渋 谷 恵 子		
7014	練 間 節 男		
7211	大 熊 敏 子		
7308	井 上　　久		
7408	出 頭 義 紀		

やまぐつ　第12号

発　行　昭和五十六年六月
発行責任　諏訪部　信一
発行団体　S・W・V・O・B会
団体所属　神奈川県山岳連盟
　　相模原市山岳協会
編　集　やまぐつ編集委員会
印　刷　博美堂印刷㈱


ESTABLISHED1968
SWVOB